

平成 21 年度 学位論文

養護教諭の「生徒への対応の意味」  
に関する研究

弘前大学大学院教育学研究科  
養護教育専攻 養護教育専修  
濱端 美奈子

# 学位論文要旨

弘前大学大学院 教育学研究科  
養護教育専攻 養護教育専修  
08GP301 濱端 美奈子

## 養護教諭の「生徒への対応の意味」に関する研究

養護教諭が保健室で対応する生徒の来室理由は様々で、その対応也多岐にわたる。医療機関に緊急搬送する対応から、簡単に言葉を交わすだけや視線を合わせてうなずくだけの対応もある。比較的軽微な状況での来室が多く、後者の対応で教室に戻る場合もあり、一見些細な対応にもすべて生徒にとって何らかの意味があるのではないかと考えている。養護教諭は児童生徒の養護をつかさどる教職員であり、その専門性は、養護教諭独自の思考に支えられた目的を持って意識的に行う養護実践に内在するものである。

そこで本研究は、養護教諭の日々の生徒への対応について、養護教諭が状況をどのように把握し、どのように解釈して対応したかという養護教諭の思考と、そこから導き出された対応に、生徒がどのように反応したかについて着目した実践分析を通して、養護教諭の対応の意味を明らかにすることを目的とした。その結果、次のような知見を得た。

養護教諭は、生徒のありのままを受けとめ、生徒に起こりうる心身の変化や周囲の人間関係の変化を推測し、生徒が悩みながらも少しずつ進む過程を支えるように心がけていた。例えば、体調を崩した生徒の身体症状に対応すると共に、安心して休養できる場を提供する等し、それによって生徒は自分のペースが守られ、自らを振り返るような変化がみられた。これは①「生徒自らが課題解決していこうとするきっかけをつくる」意味があった。また、生徒が困難な課題を前に混乱している時には、何とかしたいという思いを感じ取り、本人の考えを整理する手助けをする等していた。このことは②「生徒自らが課題と向きあう力を高める」意味があった。そして、生徒のコミュニケーション能力を高めるため、初期は、周囲の人間関係を調整し、その上で本人を交え、人とかかわる経験を積んでいけるようにする等していた。このことは③「生徒の課題解決能力を高める」意味があった。最終的に、養護教諭は、生徒が自らの課題を主体的に解決することを支援し、生徒の成長を促していた。

## 目 次

### 序章 はじめに

#### 問題の所在

1 日々の対応の中から	1
2 養護教諭の実践を研究する意義	1
3 実践の意味を問い直す	2
4 先行研究から	3
表1 日々の養護教諭の対応を分析している研究	5

### 第1章 本研究における目的と方法

第1節 目的	6
--------	---

#### 第2節 研究方法

##### 第1項 研究対象

1 研究対象	7
2 対象実践を選んだ理由	7
3 倫理的配慮	7
4 実践の概要	7

##### 第2項 方法

1 方法	8
2 手順	8

### 第2章 結果及び考察

1 生徒自らが課題解決していこうとするきっかけをつくる	
(1) 保健室に来室する前のかかわり	9
(2) 初回面談	10
2 生徒自らが課題と向きあう力を高める	13
3 生徒の課題解決の能力を高める	
(1) 居場所づくり	14
(2) 緊張状態からの解放	15
(3) コミュニケーション能力を高める	15
4 対応を導き出す養護教諭の思考・判断のよりどころとなるもの	15
表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味	17
表3 高校2年生女子B子の事例についての実践記録と対応の意味	19

### 第3章 まとめ

第1節 結論	68
第2節 今後の課題	68

### 謝辞

### 文献

## 序章 はじめに

### 問題の所在

#### 1 日々の対応の中から

日本学校保健会による平成 18 年度の保健室利用状況に関する調査<sup>1)</sup>は、小学校 373 校、児童数 202,284 人、中学校 369 校、生徒数 183,852 人、高等学校 360 校、生徒数 272,642 人を対象にし、平成 18 年 10 月初旬の連続する 5 日間の来室状況を調査したものである。その結果、高等学校の来室理由別保健室利用状況は、「体調が悪い」29.4% (18,855 人)、「友だちとのつきあい・付き添い」14.6% (9,335 人)、「けがや鼻出血の手当て」12.1% (7,727 人)、「なんとなく」7.2% (4,586 人)、「身長・体重・視力等をはかる」4.8% (3,078 人)の順に多かった。平成 13 年度との比較では、小学校・中学校・高等学校ともに「けがや鼻出血の手当て」「なんとなく」が増加していた。来室者に対して高等学校の養護教諭が対応した内容は、「医療機関への移送」0.6% (189 人)が最も少なく、「問診・バイタルサインの確認」58.9% (20,015 人)、「経過観察」52.8% (17,923 人)、「関係者・関係機関等への連絡」24.1% (8,199 人)の順に多かった。「健康相談活動」は、小学校 5.4% (2,225 人)、中学校 16.9% (5,797 人)、高等学校 21.4% (7,265 人)で、学校段階が上がるごとに増加していた。

唐牛ら<sup>2)</sup>の研究では、小学校 2 校、中学校 2 校、高等学校 2 校の平成 18 年度の保健室利用記録 12,049 件(小学校 3,476 件、中学校 4,407 件、高等学校 4,166 件)を調査対象とし、症状や処置等について実態調査している。その結果、保健室来室の理由は、年齢や発達段階、学校生活の状況等に応じて変化し、内科的・外科的症状いずれにおいても比較的軽微な状況での来室が多いことが明らかになっている。例えば、外科的症状に対して処置後「教室に帰してよい」と判断する割合は高等学校では 84.6%と高率である。

このように、養護教諭が保健室で対応する生徒の来室理由は様々で、その対応也多岐にわたる。時には医療機関に緊急搬送する場合もあれば、簡単に言葉を交わすだけの対応や視線を合わせてうなづくだけの対応をする場合もある。筆者の勤務校の日頃の保健室利用状況を見ると、唐牛らの結果と同様に比較的軽微な状況での来室が多く、後者の対応で教室に戻る場合がある。そのような日々の対応の中、短時間の対応であるにもかかわらず、養護教諭の想像を超えて、思いがけないほど生徒とのかかわりが深まることもある。一見些細な対応が、生徒にとって何らかの意味があるのではないかと感じられる場面である。また、日々の対応により、多くの生徒は変容し、成長していくと感じられる場面も多く、養護教諭のかかわりは、すべて生徒にとって何らかの意味のあることではないかと考えられる。

#### 2 養護教諭の実践を研究する意義

養護教諭は、学校教育法第 37 条、49 条(37 条準用)、60 条に定められた児童生徒の養護をつかさどる教職員である。その専門性は、養護教諭固有の思考に支えられた目的を持

って意識的に行う養護実践<sup>3)</sup>に内在するものである。

しかし、「養護教諭の行う養護の実践は、対象である児童生徒との関わりの中で進められることが基本となり、ふだんの日常生活の中で自然な関わり方でなされている、そのため当事者自身も含めて実践の意味に気づきにくく、評価されにくい」と大谷<sup>4)</sup>は指摘している。

一方、後藤<sup>5)</sup>は、「教育現場の養護教諭が行う研究は、教育実践の中から出発し、研究成果を教育実践の場に戻し、教育改善のために活用するものだ」と述べており、実践的研究の重要性を指摘している。

大谷、後藤の指摘から、ふだんの日常生活の中で自然な関わり方でなされている養護実践の意味については気づきにくい、だからこそ、実践そのものを研究の俎上に載せ、追究することの意義が大きいと思われる。養護教諭が日常の実践の中で研究することの意義について、大谷<sup>6)</sup>は、以下のことを指摘している。

①養護教諭の存在意義や養護実践の目標について、養護教諭自らが意識することができる。②養護教諭が行った行為（養護活動）について、実際に効果があったかどうかを吟味し、検証することができる。③養護実践の質を高めるための具体的な方法について検討がなされ、よりよい改善策を見い出せる。④ベテランの養護教諭の実践が職人芸として語られるのではなく、それをどの養護教諭にも具備すべき能力（知識・態度・行動力）として明らかになり、相互交流が期待できる。⑤上記で明らかになった能力は、知識・技術の体系化を図ることにより、養成・教育課程で伝授することができる。

以上のことから、養護教諭が、実践を問い直すことがその養護教諭の実践の質を高めるだけではなく、それが、養護教諭全体の実践の質を高める一助となるのではないかと考えられる。

### 3 実践の意味を問い直す

ドナルド・ショーン（佐藤、秋田訳）<sup>7)</sup>は、教師等のヒューマンサービスにかかわる専門家は、複雑で不確定性の高い問題に「状況との対話」をとおして、「行為の中の省察」を行いながら問題に対応していると指摘している。医者や法律家のような「技術的合理性」で説明される職業と比較し、その実践的知識は、自らの実践をとおしてのみ得られる。ゆえに「反省的实践家」でなければならないとしている。

佐藤<sup>8)</sup>は、「反省的实践家」としての教師は、子どもたちが生きる複雑な泥沼のような問題状況に身を置き、彼らの学習を援助する活動の意味と可能性を洞察する活動過程における省察を展開して、親や同僚や他の専門家と協力して、より複雑で複合的な価値の実現をはかる実践を展開していると著している。

小林ら<sup>9)</sup>は、養護教諭が直接、児童生徒に行った実践を対象とし、養護教諭の実践記録とインタビューを文字データにしたものをもとに、健康教育における養護教諭の思考過程に着目した実践分析を行っている。その結果、その思考過程は不確かな問題状況の中で実践をしながら思考し、漠然とした問題を明確化するものであり、実践しながら課題意識を持ち実践し、さらに評価（反省）しながら考察し実践をするという繰り返しであったと報告している。

工藤ら<sup>10)</sup>は、養護教諭と生徒の相互交流の場面を撮影したモニタリング用ビデオ記録を熟練養護教諭と新人養護教諭に視聴してもらい、気がついたこと等を自由に語ってもらい発話データを分析している。その結果、熟練養護教諭の思考の特徴として、「刻々と変わる保健室場面における子どもたちとの対応の中で、子どもの表出するサイン（発言・表情など）を敏感に感じ取り、その意味や内容に表現されている子どもの状態を解釈し、推論し対応する」ことを導き出している。

小林、工藤らの研究結果は、まさに養護教諭が「状況との対話」をとおして、「行為の中の省察」を行いながら問題に対応していることを伺うことができるものであり、「反省的実践家」としての養護教諭を著している。

それゆえ、筆者の問題意識である「養護教諭の日々の対応には、生徒にとって何らかの意味があるのではないか」という課題の解明は、単に、養護教諭の対応の行為の形や頻度のみを見るのではなく、対応における「行為の中の省察」、つまり、養護教諭固有の思考が、①どのような状況との対話において生じ、②その思考はどのようなものであったか、③その思考による対応はどのようなものであったか、④その対応は、どのような意味があったかという、内容（質）も見ることが重要になってくると考えられる。

## 4 先行研究から

先行研究<sup>11)～15)</sup>について、概要を表1に記した。これらの研究の多くは、日々の養護教諭の対応を分析し、養護教諭の対応の根拠となる「養護」の本質や内実を追究することを目的としている。その結果は、養護実践の特徴<sup>11)</sup>、教育的な意味<sup>12)</sup>、養護の実証<sup>13)</sup>、雑談という対応の意義<sup>14)</sup>、養護の本質<sup>15)</sup>として、養護教諭の対応の意味を追究するにあたり、示唆深い結果を得ている。

砂村ら<sup>11)</sup>は、養護教諭が行う「養護」を検討する視点として日々の対応に着目し、そこから養護の内実を明らかにしていくことを試みている。研究方法として文献研究と調査研究を行っている。その結果、文献研究からは、保健室で行っている養護の実際を提示していくことの必要性が示唆されている。調査研究からは、養護の内実として、養護教諭が行っている子どもへの直接的・具体的対応内容が示され、その特徴として子どもに安心や自信、自由を与えることによって人格の形成をめざしていること等があげられている。さらに、養護の内実を形成する指標として、ふだん大切にしていること（価値観）、子どもの変容等が抽出されたと報告している。

笹川ら<sup>12)</sup>は、慢性疾患を持ちながら学校生活を送った青年と、小学校当時の養護教諭にインタビューを行い養護教諭の行った対応が子どもにどう受け止められ、どのような教育的意味があったのかを検討している。その結果、子どもの成長は専門的根拠を持った養護活動によって促され、身体的アプローチは自己概念の形成に影響を与えており、対応においては、子どもの発達段階に応じた意思確認が必要であることが示されたとしている。

笹川ら<sup>13)</sup>は、救急処置場面の事例検討を行い、養護教諭のふだんの子どもたちへの対応の中に「養護」がなされていることを実証することを試みている。養護教諭は救急処置場面においても、その子の課題（ニーズ）を把握することを意識しながら、目の前の瞬時の情報や先行情報を総合的に活用して疑問を解消しようとする中で、成長の支援を行っている

る。事例検討で判断や対応の根拠を追究していく過程を通して、養護教諭が日常心がけていることを他者からの素朴な質問により改めて意識化することができる。養護教諭が他者との相互検討によって、子どもへの対応の判断や根拠を問いつけることは、養護とは何かという「養護」の内容の追究につながる等の知見を得たとしている。

高橋ら<sup>14)</sup>は、救急処置を求めて来室した生徒への養護教諭の対応（養護過程）をグループで分析し、養護教諭から意図的になされた「雑談」に注目し、その意義も分析している。その結果、生徒のかかえる「心配」は身体のことに限られるものではなく多岐にわたる。養護教諭が専門的に対応できるものは「身体症状」を中心とした内容とされるが、たとえ専門外の内容で「他の専門家の所へ」というアドバイスをすることであっても、生徒の「心配」に寄り添う姿勢で「安心」を与えることの意味が大きいこと等を報告している。

中川ら<sup>15)</sup>は、「けんかによるけが」という加害・被害が生じやすい救急処置場面で、言葉による感情表現が苦手な子どもの事例においても養護教諭は子どもの成長上の課題（養護ニーズ）を捉えながら支援しているということを実証しようと事例検討による分析を行っている。その結果、「養護」の本質として「子どもの小さな変化に気づき、それを子どもの成長と結びつけて返している」「規律の中にも安心・自由の場を設定し子ども同士の相互作用を保障する」等が明らかにされたと報告している。また、事例検討という協働の場での事例分析は、養護の本質を追究するという面からもその意義は大きいと述べている。

ただし、これらの先行研究では、前述のとおり、養護実践を「養護」の視点で日々の養護教諭の対応を分析し、対応の根拠となる「養護」の本質を追究することを目的としている。反省的实践家としての「状況との対話」「思考」「対応」「その意味」を主軸に追究したものではない。そこで、本研究では、養護教諭のどのような思考によって対応が導き出され、その対応が生徒にとってどのような意味があるのかを明らかにすることを目的とした。

表1 日々の養護教諭の対応を分析している研究

No.	著者名	タイトル	学会誌	年	研究方法	概要
11)	砂村京子 他	日々の対応からみた「養護」に関する研究第1報－子どもへの対応事例の分析から－	日本養護教諭教育学会誌 4(1)	2001	1文献研究 1)「養護」文献検索 2)養護に対する捉え方整理(小倉、杉浦、藤田、大谷) 3)施設養護と看護の基本原則を比較 2調査研究 1)経験10年以上の養護教諭19名に半構成的インタビュー 2)K J法による検討 3)事例検討	1文献研究から 1)養護の研究課題のひとつは、本質や原理を実証的に研究していくこと 2)養護の概念を社会的機能から捉える視点が必要 3)関連分野の研究成果を応用していくことが必要である。 2調査研究から 1)養護の内実とは、子どもと子どもの周囲への養護教諭の働きかけである。その特徴は、相互的、総合的、子どもを受け入れ、共に行動し、信頼関係を築くことにある。 2)養護教諭は、人間形成という教育を担っている。 3)子ども一人一人の養護の内実を規定する要因として、養護教諭の価値観、子どもの発達課題、子どもの変容が抽出された。
12)	笹川まゆみ 他	日々の対応からみた「養護」に関する研究第2報－慢性疾患を持つ子どもの自己成長に着目して－	日本養護教諭教育学会誌 6(1)	2003	1研究対象 重症アトピー性皮膚炎Y成年と小学校時のS養護教諭 2面接調査 半構成的インタビュー 3分析方法 第1報と同様 対応の関係図作成 Y成年が受けたS養護教諭からの具体的対応を保健室来室、かゆみの軽減、病気の受容の3点から分析し、日々の対応がY成年の成長へ及ぼした影響について検討	○養護教諭の行う「養護」について 1養護教諭は、子どもの将来を見通しながら関係者と連携し、自己成長を支えていた。その背景には、子どもを信じ、見捨てないで待つという基本姿勢(養護観、人間観、教育観)があった。2病気が子どもの自己成長を促す役割を果たしていた。3根拠ある専門的な判断とその子のありのままを受け入れる相談的対応が子どものニーズを満たし、自己成長を促進させる働きにつながっていた。4生理的苦痛の軽減は、自己成長を促す基本的な要因のひとつであった。 ○子どもの側から見ることによって得られた課題 1養護教諭は日々の対応において、子どもがどのような対応を望んでいるか、意思を相互に確認しながら養護活動を継続させることが必要である。 2子どもの力を信じ、「育つ」ことを援助しながら待つことの重要性を認識すべきである。 3養護教諭の日々の対応や態度から子どもとの信頼関係が生まれ、養護教諭と子どもの間に癒し・癒させる相互作用が生まれ、お互いの自己成長へとつながっていく。
13)	笹川まゆみ 他	日常的「養護」対応の分析的研究－救急場面の事例検討から－	学校健康相談研究 1(1)	2005	1分析対象 経験20年以上のB養護教諭の救急処置事例、小2A子への対応(持久走大会でゴール直前に気分不良を訴えた) 2分析方法 5人による事例検討会 1回目事例の概要 2回目「養護教諭の行為」を具体的な言葉で記述 3回目対応した理由、しなかった理由、養護教諭の「思考内容」を記述 4回目思考を促した「背景や根拠」を引き出した 5回目養護教諭のバックボーン(日常的に心がけていること、信念)を追究	1日常の救急処置場面における養護教諭の対応の特徴は、丁寧に身体症状を緩和させ、不安を和らげながら小さな診断を積み重ねることである。それらの多くは養護教諭が「身体化されたサイン」から子どものニーズを把握しようとする行為であり、養護教諭自身の対応への不安を取り除く行為でもあった。そうした意図を養護教諭自身はあまり意識せずに行っている。 2養護教諭は救急処置場面においても、その子の課題(ニーズ)を把握することを意識しながら、目の前の瞬時の情報や先行情報を総合的に活用して疑問を解消しようとする中で、成長の支援を行っている。 3事例検討で判断や対応の根拠を追究していく過程を通して、養護教諭が日常心がけていることを他者からの素朴な質問により改めて意識化することができる。養護教諭が他者との相互検討によって、子どもへの対応の判断や根拠を問いつけることは、養護とは何かという「養護」の内容の追究につながる。



表1 日々の養護教諭の対応を分析している研究

No.	著者名	タイトル	学会誌	年	研究方法	概要
14)	高橋雅恵 他	救急処置 場面で養 護教諭が 「雑談」 をした意 味一指の 痛みを訴 えて保健 室に来室 した高校 生への対 応事例一	学校健康 相談研究 2(1)	2005	1 対象 経験13年F養護教諭の高等学校保健室でのA子と付き添いB子に対するやりとりの場面(5分) 2 方法 (1) F養護教諭がメモ、一覧表を作成 (2) 研究グループで検討・協議 実践(対応)、根拠、理由を詳細に表現 経験10年以上の養護教諭10名校種は小・中・高・養護	1 保健室での来室者への対応は、「身体症状」に対する受容から始まり、F養護教諭が持つ在庫知識を活用しながら情報収集が行われ、アセスメントが行われている。緊張感あふれるやりとりが終了すると緊張感をゆるめるような話題提供が行われ、来室者とF養護教諭が一体感となる「雑談」が交わされている。途中に「雑談」が入ったとしても、最初の訴えである「身体症状」へのいたわりの言葉「お大事に」をかけて終了している。 2 雑談の意味 ①雑談を仕掛けたのは、持病を持つ生徒に対して「安心を与え、明るくなって欲しい」という養護教諭の意図があり、心身・生活の主体者としての生徒に向き合うという養護の「本質」が含まれている。②短い時間の中で、付き添いも一緒に交わされる「雑談」は、対話者間に一体感を生じさせ、解放感をも与えることができる貴重な意味ある時間である。その解放感・一体感を手当の過程で味わうことは、自らの「心配」を自分ひとりで悩むのではなく、その共有体験者に相談してみようと思わせる力を引き出させる。 3 生徒のかかえる「心配」は身体のことに限られるものではなく多岐にわたる。養護教諭が専門的に対応できるものは「身体症状」を中心とした内容とされるが、たとえ専門外の内容で「他の専門家の所へ」というアドバイスをすることであっても、生徒の「心配」に寄り添う姿勢で「安心」を与えることの意味は大きい。
15)	中川裕子 他	日常的 「養護」 対応の分 析的研究 第2報一 言葉で思 いを表現 することが 苦手な児 童の事例 検討から一	学校健康 相談研究 2(2)	2006	1 分析対象 経験20年以上のC養護教諭の「首を絞めた・絞められた」という関係で担任に保健室に連れてこられた小5A男とB男両者への対応 2 分析方法 4人による事例検討会	1 「養護」の本質として①子どもの存在を尊重し、公平に接することが基底にある。②子どもの成長を支えるための養護ニーズの診断が起点となる。③社会力を育み自立を目指す教育の一環である。④子どもの小さな変化に気づき、それを子どもの成長と結びつけて返している。⑤規律の中にも安心・自由の場を設定し子ども同士の相互作用を保障する。⑥学級で行われる養護の徹底のために担任と協働関係を結ぶ。⑦養護をする側も養護の対象者から成長させられる。⑧対応方針の基盤となる養護教諭独自の信念の形成が大事である。 2 事例検討という協働の場での事例分析は、養護の本質を追究するという面からもその意義は大きい。

## 第1章 本研究における目的と方法

### 第1節 目的

本研究では、養護教諭の日々の生徒への対応について、養護教諭が状況をどのように把握し、どのように解釈して対応したかという養護教諭の思考と、そこから導き出された対応に、生徒がどのように反応したかについて着目した実践分析を通して、養護教諭の対応の意味を明らかにすることを目的とした。

## 第2節 研究方法

### 第1項 研究対象

#### 1 研究対象

筆者は現在まで、高等学校の養護教諭を16年経験している。

研究対象は、筆者の2003年（経験年数9年）と2006年（経験年数12年）の高等学校における2つの実践である。

#### 2 対象実践を選んだ理由

養護教諭は、日頃から学校保健日誌等の執務記録をはじめ、自らの実践を何らかの記録に残している。

斉藤ら<sup>16)</sup>の研究では、養護教諭の記憶の思い起こしによる手法を用い、これによって1日の執務を終えて帰宅し、数時間を置いても印象に残っていること、例えば生徒の対応で大変だったことや気にかかっている仕事のことなどが想起され、養護教諭のこだわりや力点を置いている執務が捉えられたとしている。また、養護教諭が執務記録を書く際に、生徒の対応の中でも特に印象に残ったものは、個別に記している。生越<sup>17)</sup>は、日常性から出発する「方向探索型」研究の在り方について「養護教諭の実践を捉えようとするとき、まず求められるのはできる限り実践そのものと捉え、それを目に見えるような仕方で概念化することである。それには、まず養護教諭の実践そのものに丁寧に寄り添うことが求められる。したがってまず養護教諭が自らの実践を丁寧に記述することが求められるのである（第一次的研究者としての養護教諭）。そしてさらにそうした記述を自ら「分析」していくこともできるだろうし（二次的研究者としての養護教諭）以下略」と述べている。

そこで、養護教諭が自ら記した実践記録を分析することで、本研究の目的である、日々の対応の中で、養護教諭が状況をどのように把握し、解釈して対応したかという養護教諭の思考と、そこから導き出された対応が、生徒にとってどのような意味があるのかを明らかにすることができるのではないかと考えた。対象となる実践は、次の3つの条件を満たすものとした。第1に、養護教諭の日々の実践であること、第2に、ふりかえりができるような記録が残っているものであること、第3に、現在進行形ではなく生徒が卒業して完結している実践事例であることとし、2実践事例を選択した。

#### 3 倫理的配慮

実践事例は論旨に影響しない範囲で修正し、かつ本文においても実践事例が特定できないように表現に配慮した。

#### 4 実践の概要

##### （1）高校1年生女子A子の実践事例

①生徒数：240名

②養護教諭の経験年数：9年

### ③概要

A子は、高校1年生の夏季休業明けに欠席が続き、その後3年生まで、夏と冬の長期休業明けに保健室登校を経て、教室に戻る形を繰り返した。A子が保健室で養護教諭に話す話題の中心は、当初は友人関係だったが、時間が経つにつれて家族関係の話が多くなった。養護教諭は、保健室を安心して居られる場、新しいことに挑戦するときに戻れる場として提供し、コミュニケーション能力を高めるための経験を積んでいけるようにかかわった。A子は、保健室を基地として授業や行事に参加すると共に、ボランティア活動や部活動等の新たに所属できる場を増やしていった。

## (2) 高校2年生女子B子の実践事例

①生徒数：600名

②養護教諭の経験年数：12年

### ③概要

学級担任から、学級で起きた生徒指導上の問題について、B子に確認したいことがあり、B子と個別に面談するので養護教諭に同席してほしいとの依頼を受けた。面談をした翌日、B子が養護教諭と話をしたいと申し出てきた。B子は、これまで保健室利用のない生徒だったが、以後、頭痛、胃痛等の症状を訴え、たびたび保健室に来室した。背景に家族関係の問題があることがわかったので、親子が向き合い、さらにはB子が自分の将来を考え、行動できるようになるまで養護教諭がかかわった。

## 第2項 方法

### 1 方法

研究方法は、養護教諭が自ら残していた日常のメモや保健日誌等の記録を時系列に並べた実践記録をもとに、生徒の状況、養護教諭の思考・判断、養護教諭の対応、生徒の反応に着目して実践分析を行い、指導教員との討議のうえ、抽出された対応の意味を整理した。

### 2 手順

(1) 養護教諭が自ら残していた日常のメモや保健日誌等の記録を時系列に並べ、実践記録とした。

- (2) 実践の事実を確認しながら、記録が不足している部分を補充した。
- (3) 研究目的に沿うように、「生徒の状況」「生徒の周囲の状況」「養護教諭の思考・判断」「養護教諭の対応」「生徒の反応」「備考・その他（養護教諭以外の教員の動き等）」の6項目に分けて表に整理した。
- (4) (3) の表をもとに実践の事実を省察しつつ、「生徒の状況」「生徒の周囲の状況」「養護教諭の思考・判断」「養護教諭の対応」「生徒の反応」「備考・その他（養護教諭以外の教員の動き等）」の関係（流れ）を見ながら指導教員と討議した。
- (5) 対応の意味を主軸に指導教員と討議を重ね、抽出された対応の意味を整理した。討議の期間は、2008年6月から2009年12月まで、回数は57回、1回の所要時間は約180分であった。

## 第2章 結果及び考察

結果を表2、表3に示した。表中の矢印は、生徒の状況や反応等を見て、養護教諭が思考・判断し、対応する流れを表している。

### 1 生徒自らが課題解決していこうとするきっかけをつくる

#### (1) 保健室に来室する前のかかわり

A子もB子も保健室利用のほとんどない生徒であった。A子の事例では、「夏季休業明けに欠席が続く（表2-1-ア）」、「母親からの学級担任への連絡で（表2-2-イ）」、市民広報に保健所の思春期電話相談のことが載っていて、母親からA子に電話してみてもどうかと勧めたところ、本人が電話をかけた。電話の相談相手から『保健室に行ってみてはどうか』と勧められたが、中学校まで保健室を利用したことがなく、どうしたらよいかわからない（表2-2-ア）」という状況を養護教諭が知った。養護教諭は、「自分で電話相談に電話できたことは、大きな一歩ではないか。自分で動き出そうとしているのではないか。保健室で何か支援ができそうだ（表2-2-ウ）」と考え、「朝最初からでなくても、本人が登校しやすい時間に、いつでも保健室を利用できることを学級担任から電話で伝えてもらおう（表2-2-エ）」対応をした。するとA子は、「その翌日、保健室に登校する（表2-2-オ）」という反応を見せた。A子は、「学校に行くきっかけをつかんだ（表2-2-キ）」ものと思われる。

B子の事例では、「毎日始業前に養護教諭が生徒指導部の同僚達と行っていた登校指導で、服装の乱れ、化粧等で登校指導時に生徒指導部の教員が声をかけることがたびたびあるB子の状況（表3-1-ア）」を見て、「表情が暗く、服装が乱れていて心配だ（表3-1-

ウ)」とっていた。養護教諭は、「何か課題がありそうな生徒だと思い、気にかけて、あいさつをしたり、雑談をするなどしながら見守っていた（表３－１－エ）」という対応をしていた。これは、Ｂ子にとって、「養護教諭と顔見知りになり、後に保健室を使いやすくなる（表３－１－キ）」意味があるものと思われる。

「Ｂ子の学級で生徒指導上の問題が続き、そのことでＢ子は学級担任と学年主任に呼ばれて面談をすることになった（表３－２－ア）」ときに、この状況から養護教諭は、次の４つの思考・判断をしている。「学級で起こった生徒指導上の問題の件で、学級担任と学年主任に呼ばれて、話をするのはＢ子にとって辛いことだと感じた（表３－２－ウ）」「この状況がＢ子に今後どのように影響するのかを予測した。学級での立場が悪くなり、友人関係が悪くなって教室に居づらくなるのではないかと思った（表３－３－ウ）」「強いストレスから体調を崩したりすることが考えられるので、Ｂ子が今後保健室を利用しやすくなるような対応をしようと思った（表３－４－ウ）」「Ｂ子が追いつめられないよう、今後、保健室だけでなく、カウンセラー室も利用できるようにつなぎ、安心して居られる場所を提供する必要があると判断した（表３－５－ウ）」これらの思考・判断が「初回面談（表３－６～１５）」の思考・判断と対応につながり、後にＢ子が自己の課題と向き合うことができるようになったものと思われる。

高橋ら<sup>18)</sup>は、雑談という対応の意義について、養護教諭が専門的に対応できるものは「身体症状」を中心とした内容とされるが、たとえ専門外の内容で「他の専門家の所へ」というアドバイスをすることであっても、生徒の「心配」に寄り添う姿勢で「安心」を与えることの意味が大きいこと等を報告している。

Ａ子の場合は、利用したことのない場所だった保健室への不安に対して、いつでも利用できる場所であるというメッセージを養護教諭が伝え、Ａ子は安心して登校できるようになった。Ｂ子の場合は、日常の登校指導の中で、養護教諭が何か課題がありそうな生徒だと思い、気にかけて、あいさつをしたり、雑談をするなどしながら見守っていたことが後の信頼を築くことにつながっていった。

つまり、保健室に来室する前の養護教諭の対応が、生徒に安心と信頼を与え、初回の面談での信頼関係の深まりをもたらすものと考えられる。

## （２）初回面談

保健室登校のＡ子の事例では、「保健室登校初日、保健室に入ってきたときには、表情が硬く、肩に力が入っていて、かなりの緊張状態に見えた。いすに座ってから、来室者が入口の戸を開けるたびにそちらを見て、落ち着かない様子だった（表２－３－ア）」Ａ子の状況を見て、養護教諭は「このままでは、明日からまた、家に閉じこもってしまうのではないかな。緊張をほぐし、肩の力が抜けるような楽な姿勢で体を解放できる状態で話をした方がいいのではないか（表２－３－ウ）」と判断した。そこで、「校内の和室と一緒に移動し、畳の上に寝ころんで手足を伸ばす格好をした（表２－３－エ）」ところＡ子は、「養護教諭と同じ格好で畳の上に寝ころび、これまでの欠席の理由を話し始める（表２－３－オ）」という反応をした。

新谷<sup>19)</sup>は、「養護教諭は子どもと共にありながら、安心できる環境で感情など内面を表

出させ、子どもの思いや状況を感じ取っていた」と報告している。秋庭<sup>20)</sup>は、生徒から悩み事が打ち明けられる契機について、保健室の場合、身体的トラブルに志向するやりとりの中に埋め込まれており、身体症状の背景にある原因を尋ねられるのは、身体的トラブルに対処する専門家・養護教諭ならではのことでと著している。この場合も養護教諭は、欠席の理由を語らせるためではなく、A子の緊張した心身の状態を楽にしてやりたい思いで対応したところ、A子の緊張が和らぎ、これまで語れなかったことを養護教諭に話すという反応をした。この初回面談には、A子にとって、「校内に居られる場所があることを知り、心身を解放して、話しても大丈夫と感じる場を得る（表2-3-キ）」、「主体性を尊重され、思っていることを話し、聞いてもらい（表2-4-キ）」、「明日も学校に行こうという気持ちが湧く（表2-5-キ）」という意味があるものと考えられる。

B子と養護教諭の初回面談は、学級担任と学年主任に呼ばれてB子が面談する席に養護教諭が同席する形で行われた。B子は「緊張して、硬い表情で面談を行う部屋に入ってきた（表3-6-ア）」。

この初回面談の前に、学級担任から話を聞いて養護教諭は、「学級で起こった生徒指導上の問題の件で、学級担任と学年主任に呼ばれて、話をするのはB子にとって辛いことだと感じた（表3-2-ウ）」。

さらに、入室時の様子から、「やはりこの面談はB子にとって辛いことだと思った（表3-6-ウ）」。

そこで、「B子の不安な状態に寄り添うため、B子に養護教諭の隣に座るよう促した。養護教諭はB子の左隣に座った（表3-6-エ）」。

「気持ちを和らげて、少しでも楽に話ができるようにしてやろうと思い（表3-7-ウ）」、「『大丈夫だよ』と声をかけて座らせた（表3-8-エ）」。

B子は、「少しほっとした表情になった（表3-7-オ）」。

養護教諭は、「B子の辛い心情を思いやり、面談では生徒指導上の問題についてどのような話が出てB子を尊重しようと思い（表3-8-ウ）」、B子が「言葉に詰まったときには「ゆっくり話そうね」と声をかけた（表3-8-エ）」。

B子は、「学年主任と担任の問いに時々、言葉につまりながらも答えた（表3-8-オ）」。

これらの対応はB子にとって、「自分で考え、話すペースが守られる（表3-8-キ）」という意味があるものと思われる。

B子は、「学級担任の話を聞いて『私はやっていません』と話す。話をしている間、足を動かし、手は左手人差し指に右手親指の爪を立てる動きを繰り返す（表3-9-1）」。

養護教諭は、「やっていません。と話しながら、本人の落ち着かない様子から複雑な背景があると判断した。生徒指導部と連携し、慎重に対応する必要があると思い（表3-9-ウ）」、面談後、「生徒指導部長に問題行動としての扱いを待ってもらうよう調整し、生徒指導部、相談員との連携を促し、B子をチームで支援する体制を整えた（表3-9-エ）」。

「相談員（心のアドバイザー）の協力も得て、本人、保護者、学級担任を支える必要があると判断し（表3-10-ウ）」、面談後、「相談員に電話で経過を報告した（表3-10-エ）」。

これらの対応は、B子にとって、「自分で課題と向き合い、解決していくことを保証され（表3-9-キ）」、「支えてくれる大人が増える（表3-10-キ）」という意味があるものと思われる。

養護教諭は、初回面談の前に、この状況がB子に今後どのように影響するのかを予測した。「学級での立場が悪くなり、友人関係が悪くなって教室に居づらくなるのではないかと思います（表3-3-ウ）」、面談の中で、「学級で傷つくことを言われたり、いやな思いをしていないかをB子に確認した（表3-11-エ）」。

面談の前に、「強いストレスから体調を崩したりすることが考えられるので、B子が今後保健室を利用しやすくなるような対応をしようと思った（表3-4-ウ）」。また、「B子が追いつめられないよう、今後、保健室だけでなく、カウンセラー室も利用できるようにつなぎ、安心して居られる場所を提供する必要があると判断した（表3-5-ウ）」。そこで、面談では、「いつでも保健室やカウンセラー室を利用してよいことを伝えた（表3-12-エ）」。

学級担任が面談への同席を依頼する前から、「毎日始業前に養護教諭が生徒指導部の同僚達と行っていた登校指導で、服装の乱れ、化粧等で登校指導時に生徒指導部の教員が声をかけることがたびたびあるB子の状況（表3-1-ア）」を見て、「表情が暗く、服装が乱れていて心配だと思っていた（表3-1-ウ）」。養護教諭は、「何か課題がありそうな生徒だと思い、気にかけて、あいさつをしたり、雑談をするなどしながら見守っていた（表3-1-エ）」。この前提の上で、面談の中で、「B子にもっと自分を大切にしてほしいことを話した（表3-13-エ）」。すると、B子は、「養護教諭の話聞いているときに涙を流す（表3-13-オ）」という反応をする。養護教諭は、「B子が養護教諭の話を受け入れていると感じた（表3-14-ウ）」。この面談の後、「保健室でマニキュアを落としてから帰る提案をし（表3-15-エ）」、B子は、「保健室でマニキュアを落としながら母親との仲について話す（表3-15-オ）」という反応をする。

B子にとって、「困ったときに行くことのできる場所と相談できる人を得て（表3-12-キ）」、「養護教諭に母親との関係や家庭での立場をわかってもらう（表3-15-キ）」という意味を持つ対応であったと思われる。そして、「この面談の翌日、養護教諭と話がしたいと学級担任に申し出る（表3-16-ア）」という行動につながったのだと思われる。

いわゆる生徒指導上の問題は、生徒指導部が担当し、指導原案の決定、特別指導という形が主流である。佐藤<sup>21)</sup>は、「中学校や高校の職員会議で毎回繰り返される処分の議題では、あたかも判例に応じて起訴と不起訴を決め処置を判定する簡易裁判にも似た手続きが横行している。教師が対処し、指導しているのではなく、規則と慣例が処理し処分しているからである。規則主義と慣例主義は、学校生活のほとんどを支配している」と指摘している。問題行動に対する反省を促す特別指導は、B子にとって大切な教育の機会である。ただし、特別指導をB子が受け入れるためには、B子が家族と向き合い、自分で考えて行動できる状態になる必要があると考え、養護教諭は対応していた。最終的にB子は、「特別指導を素直に受けている（表3-40-オ）」。阿保<sup>22)</sup>は、子どもの発達を育む対応について「初期の受容・共感的対応が信頼関係を作る基礎となり、そのことが次のアプローチの導入につながって、少しずつ教育・指導的対応が成立する」と述べている。B子の事例は阿保の述べることを支持する結果となっている。

山脇<sup>23)</sup>は、「面接というのは初回が勝負である。初回に最も大事なことが聞き出せなければ、2回目以降も聞き出せない。というより、初回に大事なことを言えなければ、子どもは次の面接にこないかもしれない。この人とは話す意味がない、とってしまうのだ」と述べている。A子、B子ともに初回面談が重要な意味を持ち、後の展開に大きく影響していることが考えられる。保健室に来室する前の養護教諭の対応が、生徒に安心と信頼を与え、初回面談で信頼が深まり、そのことが生徒自らが課題解決していこうとするきっかけをつくる意味を持つものと思われる。

## 2 生徒自らが課題と向きあう力を高める

B子の事例では、「B子が追いつめられないよう、今後、保健室だけでなく、カウンセラー室も利用できるようにつなぎ、安心して居られる場所を提供する必要があると判断した（表3-5-ウ）」養護教諭が、初回面談の際に、「いつでも保健室やカウンセラー室を利用してよいことを伝えた（表3-12-エ）」。B子は、早速「翌日、養護教諭と話がしたいと学級担任に申し出た（表3-16-ア）」。「その次の日には、6校時保健室に来室し、学級担任と話がしたいと言う（表3-19-ア）」。「この時点では、「問題を自分で何とかしたいので、両親に内緒にしてほしいと担任に話し（表3-20-オ）」ている。しかし、翌週は、「胃痛等の体調不良の症状を呈して保健室に来室する（表3-22-ア）」ものの、「週末親と話そうとしたが、うまく話ができなかったので、学校で学級担任と相談員と一緒に居てもらって親と話したいと語った（表3-23-オ）」。「養護教諭は、「家も教室も今のB子にとっては居心地の悪い場になっているのではないかと思います（表3-22-ウ）」、保健室に来たときには、「少しでも安心して休養し、考えたり、行動するための力を蓄えさせたいと考えた（表3-23-ウ）」。「主訴に対して誠実に対応し、ベッドで休養させた（表3-22-エ）」。「そして「ベッドの横で話を聞きながら、気持ちを言語化させることで、B子の考えを明確にする手助けをした（表3-23-キ）」。「この対応は、B子にとって、「問題行動のことに関わらず、ありのままの自分を信じて受け入れられ、症状が回復し（表3-22-キ）」、「自分の考えを言語化し、養護教諭にわかってもらう（表3-23-キ）」という意味があるものと思われる。B子は、「この後も保健室、カウンセラー室を多く活用しながら、両親との話し合いがうまくいかない場合でも、あきらめずに生徒指導上の問題も含めて向きあっていく（表3-34～36）」。「つまり、ここでの一連の養護教諭の対応は、B子が自ら課題と向きあう力を高める意味があるものと考えらる。

A子の事例では、1年生の夏季休業明けの保健室登校から始まり、「1年生の冬季休業明け（表2-66～69）」、「2年生の夏季休業明け（表2-92～94）」、「2年生の冬季休業明け（表2-98～104）」の4回、長期休業明けに連続した欠席から保健室登校、そして教室へという同じようなパターンを繰り返した。養護教諭は、A子の欠席には必ずA子なりの理由があり、それを明確にして対応することで、A子は、あきらめたり、逃げたりせずにその都度課題と向きあった。その結果、「3年生になって、A子は、『先生、私、いつも夏休み明けに学校を休んでしまうので、夏休みの後半に自分だけの出校日を作ろうと思います。先生の都合のいい日に保健室で勉強してもいいですか？』と自分から提案し（表2-116-ア）」、「自分決めた出校日に保健室で3日自習した（表2-116-オ）」。「さらに、夏休み明けも休まず保健室登校からスタートした。「すぐに翌日から数時間ずつ授業に参加し、翌週からは昼休みのみ保健室で過ごし、それ以外は教室で過ごし始めた（表2-117-ア）」。「徐々にA子が自ら課題と向きあう力が高まっていったことがわかる。



### 3 生徒の課題解決の能力を高める

#### (1) 居場所づくり

B子の事例では、保健室とカウンセラー室が、安心して休養や相談のできるB子の居場所となっていた。同様に、A子の事例では、「保健室登校初日、保健室で緊張したまま、落ち着かない様子のA子(表2-3-ア)」を養護教諭は「別室へ連れて行き(表2-3-エ)」、「頑張ろうと気負いすぎず、学校には教室以外にも保健室も礼法室もその他の部屋もたくさんあるから、そこを活用しながらこれからのことを一緒に考えようと声をかける(表2-5-エ)」。

A子は、「校内に居られる場所があることを知り、心身を解放して、話しても大丈夫と感じる場を得る(表2-3-キ)」。

その翌日から保健室を居場所に過ごし始める。また、「養護教諭が不在の時には、家庭科教員のいる試食室を保健室と同様に活用できるようにし(表2-36-オ)」。

A子は、「養護教諭不在時にも、安心して登校できる環境を確保された(表2-36-キ)」。

三村<sup>24)</sup>は、「休息をとるための「居場所」、また、そこから人とのつながりを持ち、成長していくための「居場所」、この二つの機能を保健室は養護教諭がいることで持っているの」と述べている。志賀ら<sup>25)</sup>の研究では、「保健室としての固有のスペースとしての『居場所』の確保と、養護教諭という『固定した対応者』が居て継続的なかわりをもつことで保健室登校生は、落ち着きを取り戻したり、何かやろうとするエネルギーが出たり、自分の気持ちを話せるようになったり、自己表現ができるようになった」と報告されている。

A子が、「養護教諭に『鞆とかここに(保健室に) おいていいですか?』と話し、教科の道具だけ持って教室へ(表2-29-ア)」行き授業に参加した。「93日目。1校時～4校時、鞆は保健室に置き、必要な道具を持って教室で授業に参加。昼休み保健室で昼食をとった。すぐに帰らず、母親に14:00に迎えにくるようお願いしたのでそれまで読書をした」と申し出た(表2-74-ア)」。

「110日目。3校時、保健室で運動着に着替えて、体育館で体育の創作ダンスの授業に参加(表2-81-ア)」した。このように、教室で授業を受ける時や長い期間参加できずにいた体育の授業に出るとき、つまり、新しいことに挑戦するときに戻れる場所、すなわち保健室がA子の基地のような場所になっている場合もあった。

養護教諭が、「ボランティア活動のようないろいろな人との交流の機会をとおしてコミュニケーションの範囲を広げ、所属できる場所が小さなグループや学級以外にあることを体験させたいと考えた(表2-11-ウ)」ことと、「A子に何か自信を持たせたい、好きなパソコンをいかせないか(表2-78-ウ)」と思ったことから働きかけ、A子は、「ボランティア活動に参加したり(表2-11、25)」、「パソコン部の活動に参加した(表2-84)」。

これは、保健室や教室以外に新たに所属できる場所としてA子にとっては居場所となっていたのではないだろうか。

安心していられる場所、新しいことに挑戦するときに戻れる場所、所属できる場所を確保することで生徒の課題解決の能力を高める意味があるものと思われる。

## （２） 緊張状態からの解放

初回面談で養護教諭は、生徒の緊張状態を和らげる対応をして、生徒が安心して気持ちを表出したことは、先にも述べたとおりである。

豊嶋<sup>26)</sup>は、学校における相談活動について、「まずは《共にあり》、次に脱学校的な活動を《共に行う》ことから、始めてみると良い。中略《共に行う》のは、《関心を向け、寄り添い共にあろうとする覚悟》をさりげなく伝える効果がある」と述べている。A子の事例では、初回面談の後、教室で授業に参加するまでに、養護教諭が、緊張を和らげ、保健室を安心して利用できるようにさせたい。そのために、「A子の興味のあることやリラックスできることを会話の中から見つけ、その中に保健室でできることがあれば取り入れてはどうかと考えた（表２－１５－ウ）」。

A子と会話をし、「コラージュの作品を一緒に作り（表２－１７、１８）」、「保健室登校１２日目、コラージュを細部にまでこだわって完成させた。完成したコラージュを養護教諭とお互いに紹介しあった（好きなアーティスト、好きな食べ物、行ってみたいところ）笑顔で、饒舌に話した（表２－２１－ア）」。

A子にとって、「コラージュは楽しく、行動する力が湧いてくるような効果があったのではないかと考えられる（表２－１８－ウ）」。

その後、「保健室にきた友人とおしゃべりをしたり（表２－２２－ア）」、誘ってくれた「友人と一緒に教室に行き、授業に参加できた（表２－２３－オ）」。

このように、緊張状態から解放する対応は、信頼関係を深めると共に、生徒の課題解決の能力を高める意味があるものと思われる。

## （３） コミュニケーション能力を高める

A子の事例では、コミュニケーション能力を高めるため、「初期段階では、周囲の人間関係を調整し（表２－１３）」、「その上で本人を交え（表２－２２）」、人とのかかわる経験を積んでいけるようにしていた。後にA子は、「修学旅行に参加したくない理由を母親に感情的にならず、はっきりと説明できた（表２－９７－オ）」。

門脇<sup>27)</sup>は、「人間の社会力は他者との相互作用によって培われるものである」と著している。日常的な他者との相互作用の代表的なものが身近な人とのコミュニケーションではないかと思われる。このように、コミュニケーション能力を高める対応は、生徒の課題解決の能力が高められる意味があるものと思われる。

## ４ 対応を導き出す養護教諭の思考・判断のよりどころとなるもの

小林ら<sup>28)</sup>の研究では、健康教育を支える基盤としての能力（健康観、子ども観、養護教諭観、教育観）が基盤能力として、基本能力・成立能力の方向性を規定しながら、相互に作用し機能を高めあっていることが捉えられた。新谷<sup>29)</sup>の研究では、「養護教諭の深い子ども理解、現象の洞察力、子ども観・教育観を含んだ養護教諭の思考は、養護教諭の「専門的立場からのニーズ」である子どもにとって今何が必要なのかという判断を生みだし支えていた」と報告している。

筆者が日々の実践の中で大事にしていることは、生徒が置かれている混沌とした状況に

共に向きあい、養護教諭として生徒の状況をわかろうとしながら（なぜだろう、これでいいのかを常に問い）かかわることである。このことが、様々な状況において思考・判断のよりどころとなっているものと考えられる。例えば、B子が「初回面談の席に緊張した状態でやってきたのを見て（表3－6－ア）」、「どのような話が出てB子を尊重しようと思（表3－8－ウ）」、B子が「言葉に詰まったときに手助けしている（表3－8－エ）」。

この対応によってB子は、「学年主任と学級担任の問いに何とか答えた（表3－8－オ）」。

この対応はB子にとって、「自分で考え、自分の言葉で話すペースが守られる意味があった（表3－8－キ）」。

A子の事例では、「生徒の状況をみて対応の見直しをしながら（表2－58、70）」かかわりを継続していた。「A子が高校3年生の学校祭に参加した後、野球応援には参加できないと申し出た際（表2－113－ア）」、他の教員からは「わがままではないか、出たい行事を選んでいるのではないか」という意見が出る中（表2－115－カ）」、養護教諭と学級担任は、「A子が『学校祭の準備のときから、周りとうまくやるためにいっぱいいいっぱいでした。授業は何とか出ているけど、今は行事は無理です。すみません』と話した（表2－114－オ）」ことから「甘えやわがままではないと判断して（表2－115－エ）」対応している。

時には、A子の状況や反応から養護教諭が対応を見直すこともあった。「体育の授業になかなか参加できないことで、A子が養護教諭に気を遣って謝っている（表2－58－ア）」。

ここで養護教諭は、「体育の着替えの件での養護教諭の働きかけがプレッシャーになっている（表2－45～48）」と感じている。そして、養護教諭自身の対応を見直さなければと思った。さらに、遅刻をしてきた日も、A子なりに考えて、頑張っていることがわかった。「何日かに一度でも授業に全部参加できる日があるのは、確実に前進しているのではないかと考えている（表2－58－ウ）」。

「1年生の冬季休業明けの欠席の理由をA子が話した時には（表2－69－オ）」、養護教諭も学級担任もA子が講習を休まず、保健室も利用せずに頑張っていた陰で、大変な思いをしていたことに驚いた。A子は「養護教諭や学級担任に心配をかけないようにしたい、期待を裏切らないようにしようと思っていたのではないかと判断し（表2－70－ウ）」、「ゆっくりと始めよう。と声をかける（表2－70－エ）」対応をとっている。また、表2－74、93、120では、A子が、一見マイナスに見える状態でもA子なりの頑張りと養護教諭が認識している。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
1	1年生夏期講習会（全員参加）の後半から夏季休業明けにかけて欠席が続く。	母親から欠席の電話連絡が連日担任宛にある「体調が悪いので休ませます」				1年学級担任が欠席の状況を養護教諭に報告し、家庭訪問等の計画を立てようとしていた。	
2	市民広報に保健所の思春期電話相談のことが載っていて、母親からA子に電話してみてもどうかと勧めたところ、本人が電話をかけた。電話の相談相手から「保健室に行ってみてはどうか」と勧められたが、中学校まで保健室を利用したことがなく、どうしたらよいのかわからないとのこと	母親から学級担任に電話連絡。	自分で電話相談に電話できたことは、大きな一歩ではないか。自分で動き出そうとしているのではないか。保健室で何か支援ができそうだ。	朝最初からでなくても、本人が登校しやすい時間に、いつでも保健室を利用できることを学級担任から電話で伝えてもらった。	学級担任が連絡をした翌日、通常の登校時刻に登校し、保健室に来室した。登校手段は母親の車で送ってもらった。	電話連絡を受けた担任が養護教諭に報告、相談。	A子は学校へ行くきっかけをつかむ。
3	保健室登校初日。保健室に入ってきたときは、表情が硬く、肩に力が入っていて、かなりの緊張状態に見えた。いすに座ってから、来室者が入口の戸を開けるたびにそちらを見て、落ち着かない様子だった。		このままでは、明日からまた、家に閉じこもってしまうのではないか。緊張をほぐし、肩の力が抜けるような楽な姿勢で体を解放できる状態で話をした方がいいのではないか。	和室（畳の部屋）に一緒に移動した。寝ころんで手足を伸ばす格好をした。	A子は、養護教諭と同じ格好で畳の上に寝ころび、欠席の理由を話し始めた。		A子は、校内に居られる場所があることを知る。心身を解放して、話しても大丈夫とを感じる場を得る。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
4			生徒の主体性の尊重し、生徒の言いたいことを言わせる。初回は無理に話させず、信頼感を築くよう努めることが大事ではないか。	「今日は、よく学校に来たね。会えてうれしいよ。話したくないことは無理に話さなくてもいいからね。難しい言葉でなく、思い浮かんだ単語でもいいから、話せることを話してみて。今後のことを一緒に考えよう」と声をかけた。	A子「学校祭(夏季休業直前に実施)が終わったあたりから、一緒にお昼を食べているグループのB子さん、C子さん、Dさんがよそよそしい感じがしていました。特に、Bさんはメールアドレスを新しくしたのに、私にだけ教えてくれない。私は、中3の秋ごろ同じクラス的女子に無視されて、つらくて学校に行きたくないと考えたことがありました。でも、卒業まで後少しと思って学校に出るようにしていました。違うクラスに仲のいい友達がいて、その子(E子)が励ましてくれたから頑張れたけど。今も中3の時のようになるのではないかと不安で教室に行けません。同じ中学校から今のクラスに私一人なので友達がいないのだと思います。家で、自分で勉強していますが、思うように進まないです。学校で先生に教わりたいです。高校は卒業したいです。」と、一気に勢いよく話した。		A子は、主体性を尊重され、思っていることを話し、聞いてもらう。
5			教室以外にも活用できる場所があることを知らせ、また来てみようという気持ちを持てるようにする必要があると思った。	「頑張ろうと気負いすぎず、学校には教室以外にも保健室も礼法室もその他の部屋もたくさんあるから、そこを活用しながらこれからのことを一緒に考えよう。女子の友人関係は、今のまま固定ではないよ。とても流動的だから、B子さんたちとの関係が今ダメだから全部ダメではないからね」と声をかけた。	A子「明日も最初から保健室に行ってもいいですか?」と話した。		A子は明日も学校に行こうという気持ちが湧く。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
6	2日目。A子「今日は親が仕事で早い時間からだったので、自転車で来てみました。本当は、学校に来るかどうか悩んだのですが、教室に入れなくても学校には行ってみなさいと親に言われたので来ました」		親に言われたので来ま したという話し方が気 になった。親からの自 立の過程？自分の考え と親の考えを分けて認 識できるようにさせる 必要があるのではない か。	「自転車で来たのね。す ごいよ。ところで、親の 言うとおりに来たと言っ ていたけど、A子さんの 気持ちは？」と聞いた。	A子「私も、授業に出られなく てもとりあえず行ってみようと思 って来ました」		A子は、親の考えと 自分の考えを分けて 振り返る機会を得 る。
7			自転車で来たこと は、親が車で送って くるよりも、本人の意 思と行動する力が強 くなければいけない ことではないか。通学 手段にも注目する必 要があるのではない か。	A子の状態を把握する 際に、登校手段をA 子の自分で行動する 力の量を見るバロメ ーターとして捉える。			
8	2校時が終わり、保健室に戻ってきて、とても急いで帰ろうとしたので、座らせて「どうしたの？」と尋ねた。A子「エプロンをつくっているとときに学級担任が来て、いつごろから教室に行けるかと聞かれて、とてもプレッシャーを感じました。いつ頃から何てわからないし、答えられないです」		学級担任はA子を早く 教室に行かせようと 焦っているのではない か。	「それは、きつかった ね。プレッシャーに感 じることではないよ。今 日は今日、明日は明日 で自分の考えを大切 に行動しよう。親や学 級担任とあなたの考 えが違うことがあつ てもいいのよ」	少し落ち着いた様子に なり、さようならと 挨拶をして下校した。	家庭科教員がエプロ ン作りの実習をしよう とA子に声をかけた。 実習の途中、学級担 任も様子を見に行き、 声をかけた。	A子は、保健室以外 の場所で活動する経 験をする。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
9				A子が下校してから学級担任に、帰りの様子を知らせ、今のA子の状態では、教室にいつから行くかどうかを話題にするのは早いのではないかと話した。		1年学級担任は早くA子を教室に行かせたいと考えていて、焦っている様子だった。	養護教諭が学級担任の焦りを把握し、働きかけることで、A子は、自分のペースが守られる。
10	3日目。バスで登校。A子「昨日、C子さんからメールがきたけど、気が付いたのが夜遅くて返事はだしませんでした。返事は今日だそうかな」			「今日でもいいと思うよ。C子さんも含めて、今、話しをしたらクラスの誰としたい？」	A子 しばらく考えて「思い浮かびません」		
11			ボランティア活動のようないろいろな人との交流の機会をとおしてコミュニケーションの範囲を広げ、所属できる場所が小さなグループや学級以外にあることを体験させたいと思った。	「そうか、今は思い浮かばないのね。B子さん、C子さん、Dさんとのグループの関係が全てではないよ。他の人とも交流してみてもどうかな。来月、町の敬老会のボランティア活動があるんだけど、よかったら参加してみない？私が顧問だから引率するよ」	説明を聞いて、興味を持った様子。後に2回のボランティア活動に参加した。		A子は、校外で活動する経験をする事で人間関係を広げ、居場所を増やすことができる。
12	A子「みんなが普通にできることを私はできない。みんな、普通に学校に来て、授業受けているのに私はできない」		人との比較ではなく、自分で目標を立てて、それに向かう経験をさせる必要があるのでは？その結果、達成感や自信を得るのではないかな？				

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
13		A子が下校した後B子、C子、D子が保健室に来室。	B子は「私たちが悪いと思われるのは嫌だ」という思いが強いようだ。D子が比較的冷静で客観的に話しができた。	D子だけに後で話を聞いた。			A子は、現時点で自分で調整できない周囲の人間関係を養護教諭に整えてもらう。
14	5日目。学級担任に、A子「3人と会って話をしていた方がいいことは分かっているけど、怖いです」と話した。		A子は学級担任に自分の気持ちををはっきりと伝えることができていたと思った。			学級担任から3人と直接会って話をしてみてもどうかと提案。	
15	6日目。		緊張を和らげ、保健室を安心して利用できるようにさせたい。そのために、A子の興味のあることやリラックスできることを会話の中から見つけ、その中に保健室でできることがあれば取り入れてはどうか？	「A子さんはにとって、1日の中でリラックスできるときは何をしているとき？」	A子「犬と散歩をしているとき、熱帯魚の世話をしているとき、あとは、部屋で読書をしたり音楽を聞いているときです」		A子は興味のあること、リラックスできることを自覚する。
16			登校した日も欠席した日も、1日の中でリラックスできる時間を持つことはA子にとって大切ではないか。特に、屋外で体を動かす犬の散歩は家にこもりがちなA子のリフレッシュには重要ではないか。	「私もそうだけど、じっとして考えすぎたり、緊張が強いときにこそリラックスできる時間を持たないとまいってしまうよ。特に、犬の散歩のように外で体を動かす時間は大切だね。ねえ、A子さん、学校を休んだ日も犬の散歩は日課にしようよ」	A子「あ、先生、実は学校欠席した日も犬の散歩は毎日していました」		A子は、犬の散歩で屋外で体を動かす機会を持っていることが緊張を和らげることにつながることを自覚する。



表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
17	(中学校の時の美術部の活動の話をしている中で) A子「先生、コラージュってわかりますか？私、それを作ったときが一番楽しかったです」	→	心理技法的な意味は特に重要視せず、養護教諭とA子のお互いが自己開示し、信頼関係を築く手段としてコラージュを活用しようとした。	「コラージュいいね。あ、A子さん、コラージュしようか。例えば、私の好きなものというテーマでそれぞれ作って、できあがったら紹介しあうのはどう？」	A子「楽しそうに笑顔で「やりたいです」		A子は、楽しいと感じることをきっかけに、やる気や意欲が増す。
18	A子「早速、作り出す。帰りの時間が近づいたあたりに、作業を続けながら(50分ぐらい作業した後)「先生、私、覚悟ができてきました。来週から授業に出てみようかな？」と話す。	→	養護教諭はこのとき急なこの発言に意外な感じを受けた。しかし、振り返ってみると、A子にとってコラージュは楽しい→力が湧いてくる→授業に出てみようかなという考えが浮かぶという流れだったのではないかと。		実際に、授業参加するのは、13日目。11日目、A子「先生、今日は授業にはまだ出られないけど、時間割どおり全部道具を持ってきました」		A子は、授業に出てみようかな、ボランティア活動に参加してみようかなという気持ちが湧く。
19	A子「本当は、今日みたいに朝みんなより遅れてくるのもいやなんです。きちんと朝から来て、1時間目から6時間目まで出席しなければいけないと思います」	→	登校するなら朝から、授業に出るのならば1時間目から全て出席しなければならないと、思っているようだ。いっぺんに完成させるのではなく、少しずつ増やしたり、時には休んだりしながら柔軟に目標に向かう体験をさせることが必要ではないかと。	「最初から完璧でなくてもOKなんだよ。参加できそうなものから少しずつ増やしたり、時には休んだりしながらでいいんだよ。柔軟かく、何でもありというつもりで少しずつ進もうよ」	13日目から数時間ずつ授業に参加した。		A子は、物事には複数の可能性があり、選択肢をたくさん持っていていいことを知る。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
20	2日欠席の後。10日目。バスで登校。A子「先生、ボランティア活動に参加します」と養護教諭に話し、学級担任が来たときに保護者承諾書を提出した		授業に出てみようかなと思っても実行できないまま、2日の欠席。しかし、ボランティアに参加したいという。A子が揺れているなど感じた。				A子は気持ちの揺れを受けとめられる。
21	12日目。コラージュを細部にまでこだわって完成させた。完成したコラージュを養護教諭とお互いに紹介しあった（好きなアーティスト、好きな食べ物、行ってみたいところ）笑顔で、饒舌に話した。		笑顔で、こんなにたくさん話ができる子なんだなと思った。安心した。				A子は、自分の作品を養護教諭と紹介しあい、笑顔でたくさん話す時間を養護教諭と共有し、信頼を深める。
22	休み時間にC子、D子がきて、おしゃべりをした。（メールアドレスのこと、秋祭りのこと）		友達と話をして、うれしい、楽しいと感じる経験を今後も積み重ねていくことが大事ではないか。		C子、D子が教室に戻ったあとA子が「うれしい。中学校の時はこんなふうに会いに来てくれる人はいなかった」と話す。養護教諭が会ってみてどうだった？と聞くと「会ってみることは思っていたより簡単だと思いました」と答えた。		A子は同級生と交流する機会を確保された。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
23	13日目	1校時が始まる前にD子が来室し、A子に「おはよう。ねえ、教室行こうよ」と声をかけ、手を握った。	自分で数日前から時間割とおりの道具を持ってきたこと、C子、D子と会って話をしたこと、教室に行ってみる力がA子に高まってきたところに、友人（D子）の力、勢いが加わって教室に行くことができたのではないかな。		勢いにA子が「うん」と答えて立ち上がった。そのまま、教室へ移動。1校時から3校時まで教室で授業参加。		A子は、自分の行動する力に、養護教諭と友人の力を加えて、課題解決へ前進する。
24	4校時「胃が痛い」と訴え保健室へ（体温35.9℃、脈72回／分、保健室休養）最初、胃が痛いと言っていたが、興奮した様子で「緊張したけど、教室に行けました。授業にできました」と話した。		久しぶりに教室で授業を受けたので、体も反応しているのだなと思った。教室に行くことができたことは、大きな自信につながるのではないかなと感じた。	養護教諭から 大きな壁を自分で越えたことに自信を持つよう話した。			A子は、教室に行くことができるという自信を得た。
25	敬老会ボランティア活動参加。		上級生との交流も含め、学級だけではできない経験を増やすことで、視野を広げることができるのではないかな。	ボランティア主催側のスタッフや参加生徒に協力を求めた。	最初は緊張した様子だったが、3年生とペアを組んで老人を座席に案内したり、S子、T子と弁当運搬と袋詰め作業をしているうちに、笑顔でおしゃべりをする様子が見られた。		A子は異年齢の人と交流する機会を得た。
26	14日目。保健室で学級担任にボランティア活動の感想を話す「ボランティアは疲れたけど、楽しかったです」		担任とは明るく話している様子だったが、先週ほどの元気がない印象を受けた。	積極的に養護教諭から働きかけや、提案はせず見守った。			A子は、元気がないときも見守られ、ペースが守られる。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
27	17日目。バスで登校。		定期考査が近づき、本人が今後どうしたいのかを確認し、学校での支援体制を整える必要があるのではないかな。	学級担任と相談のうえ、面談をした。	学級担任と面談（保健室で養護教諭も同席）今後どうしたいのかについて A子の話の要点 ・この学校を卒業したい。 ・卒業して、専門学校（服飾系）に進学したい。 ・勉強したい。授業に出ないとみんなについていけない。勉強したいけどどうしたらいいのかわからない。	職員朝会にて学級担任から全職員へ連絡・A子の状況・定期考査を受けること・各教科担当者への指導のお願い（課題、空き時間の指導等）をした。	A子は、高校を卒業し、進学したい意思をわかってもらい、学習の機会を確保される。
28	2校時 理科の教科担任が来室 欠課分のノートの写しを届け、指導理科教員が最後に3校時の理科の授業に出ないかと誘った。A子「はい、行ってみます」と答えた。		若い理科の教員の熱心な指導で、自習だけではわからなかった部分が理解でき、うれしそう様子。元気が増してきたように見えた。			2校時 理科の教科担任が来室 欠課分のノートの写しを届け、指導。	A子は、自学ではなく、教員からの指導により、わかることの楽しさ、もっと学びたいという気持ちを実感する。
29	A子が養護教諭に「鞆とかここに（保健室に）おいていいですか?」と話し、教科の道具だけ持って教室へ		保健室が基地のような場所になっている。鞆を置いていく行為から、小さな子どもが遊んでいる途中にお母さんを確認にくる行動が連想される。いつでも戻ることのできる場所を確保することで、安心して教室にいけるのではないかな。		3校時 教室へ 理科の授業に参加。休み時間、保健室に来て、「次の時間も出てみます」と話し、次の教科の道具を持って教室へ。		A子は、新しいことに挑戦する時に、いつでも戻ることのできる場所を確保する。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
30			<p>いろいろな教員との関わりもA子の力になるのではないかな。</p> <p>←</p>		<p>校長退室後A子が「校長先生が声をかけてくれて、うれしかったです。校長先生と話をしたのは初めてです」とはしゃいだ様子で話した。</p>	<p>校長が来室してA子に声をかけた「A子さん、先生方全員が応援していますよ。ゆっくりでいいから、進んでいきなさい」</p>	<p>A子は、多くの教員と関わる機会を得る。</p>
31	<p>19日目。2学期になって初めて昼食を持参した。A子「いやあ、教室ではなくて、昼ご飯を食べているときに沈黙ができると自分が悪いからではないかと思ってしまいます」</p> <p>→</p>	<p>昼休み B子、C子、D子の3人が来室し、昼食を一緒にとる。D子がムードメーカーになりながら、食事をしていた。</p>	<p>自分が悪いと思ってしまふ→自己肯定感の低さ。食事をとりながらの会話は、高度なコミュニケーション能力を要するので、保健室で他の来室者を交えながら、時間をかけてゆっくりと経験を積んでいく必要があるのではないかな。</p>				<p>A子は、自分だけではどうしてもできない課題（自己肯定感の低さや友人とのコミュニケーション能力の低さ）を養護教諭に把握される。</p>
32	<p>20日目。バスで登校。</p>	<p>S子がU子を連れて来室。S子「A子さん、この間のボランティア一緒にやって楽しかったよね。次の募金のボランティアも一緒に出ようよ」とA子に声をかけた。U子「ねえ、一緒に次の授業に行こう」</p> <p>→</p>	<p>S子、U子等がA子の今後の力になってくれる存在ではないかな。</p>		<p>S子の誘いに、A子「参加してみようかな。」U子の誘いに、A子「うん」5校時 鞆は保健室に置き、必要な道具を持って教室へ 現代社会の授業に参加。</p>		
33	<p>21日目。A子「5時間目の体育の時の移動が不安です。話しかけられるのは、気にならなくなったけど、話しかけていやな顔されたらどうしようと思うと、話しかけられないです」</p> <p>→</p>		<p>体育は教室で座って受ける授業と異なり、A子にとっては新しいことに対する不安となっているのではないかな。</p>				<p>A子は、自分だけではどうしてもできない課題（体育の授業への不安、自分から話しかけることへの不安）を養護教諭に把握される。</p>

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
34	A子は、担任を見て表情を硬くし、肩に力が入り、緊張した状態になった。どうにか、早退すること、次のボランティアに参加することを担任に話した。担任は、なるべく早退しないようにと話し、A子がさらに緊張を強くし、何も話さない状態になった。		学級担任とA子の関係は教室にA子が戻るための重要な資源になるのではないかと。養護教諭は、A子も学級担任も犬を飼っていて、以前、それぞれ犬の話を楽しそうにしていたので、犬の話をしたらお互いにうち解けられるのではないかと思った。	「〇〇先生、犬を飼っているんですよね。A子さんも犬を飼っていて、世話も全部やっているんですよ」と話し、学級担任とA子の互いの自己開示と交流を促した。	担任が「犬飼っているのか、種類は何？」とA子に話しかけ、A子も緊張がほぐれた様子で、犬の話で盛り上がっていた。	保健室に戻り、母親が迎えに来るまでの間、学級担任が声をかけに来室。	A子は、学級担任と互いの自己開示、交流する機会を得て、担任への緊張が和らぐ。
35			養護教諭不在時も保健室と同様に、安心して安全な基地となる場所が必要ではないか。家庭科の試食室ならば、親しみやすい家庭科教員が隣の部屋にいて、利用しやすいのではないかと。	養護教諭不在時の対応について、家庭科教員と学級担任の二人に相談した。			
36	22日目。自転車で登校。明日からの定期考査が終了後、養護教諭が2日間出張のため不在の日があることを知らせた。A子「私も休んでいいですか？」			帰る前に、家庭科の試食室に一緒に行ってみた。	以降、養護教諭不在時は、欠席することなく、試食室で家庭科教員とともに過ごした。	家庭科教員がA子に部屋の説明と養護教諭がいるときでも、いないときでもいつでもいらっしやいと話した。	A子は、養護教諭不在時にも、安心して登校できる環境を確保される。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

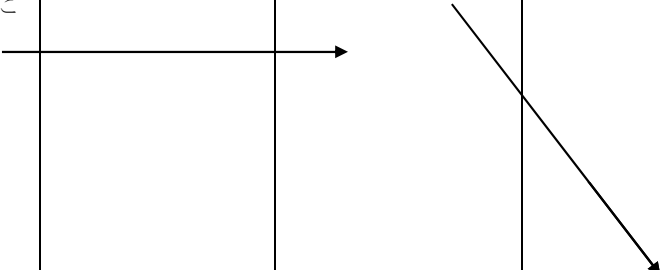
	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
37	街頭募金ボランティアに参加。				C子、D子、S子、T子、U子等1年生や2年生達と笑顔で大きな声で呼びかけて活動した。		A子は、同級生や異年齢の人と交流する機会を得たふだんはなかなか経験できない、屋外で大きな声を出す活動の経験した。
38	30日目。欠席。祝日にボランティア活動のあと、中学校の同級生と遊んで楽しく過ごしたのに、今朝になって「学校へ行きたくない」と言っただので、わがままではないかと注意したところ怒って部屋に入ったまま出てこないとのこと。	欠席 母親から学級担任に電話連絡。	A子なりの理由があつて、今回の欠席早退に至っているのではないかと。うまく表現できず、母親に理解してもらえないでいるのではないかと。 				A子は、欠席、早退には自分なりの理由が必ずあることを理解される。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
39	33日目。			「ボランティア寒い中よく頑張ってくれたね。その後、何かあって欠席とか早退になっているのでしょうか。A子さんは理由もなくそんなことはしない人だと思う。いったいどうしたの？」	A子「土曜日に学校から帰って、Eさんと遊びました。その時に、月曜日（祝日）も遊ぶ約束をして、ボランティアの後で一緒に買い物に行きました。そこで、中学の同級生で中3のとき私を無視した友達と会って、Eさんは楽しそうに話をしていて、私はそこから逃げ出したいくらいいやだったけど、我慢して話が終わるのを待っていました。帰宅してから、部屋に引きこもっていました。火曜の朝、母親に学校に行きたくないと言ったらわがまと言われ口げんかをして、また、部屋にいました。あつ、先生でも、犬の散歩は行きました」		A子は、欠席の理由について、自分の言葉で語り、受けとめられる。
40	少し沈黙した後、「先生、私、中3の無視されたときから時々、リスカしちゃうんです」左の手首を養護教諭に見せた。（軽い擦過傷が複数あり。形状は直線。古い傷や深い傷はなし）			「中3の時のことはつらかったんだね。よく話してくれたね。一人でしんどかったね。どんなときにリスカしちゃうのかな？」	A子「親とけんかしたときとか、いやなことがあったときとか……。定規でこするんです」		A子は、これまで話せなかったリスカ（手首への自傷行為）について、語りを受けとめられる。
41			リラックスできる時間の持ち方を工夫することで、不安なとき、いやな気分などのときの対処方法を自傷行為以外に体得できるのではないかな。	「不安なとき、いやな気分のときに手首を傷つける以外の気持ちを表現したり、気分転換をする方法をこれから一緒に探してみようよ」	A子「先生、こういうの見て気持ち悪くないですか？」		



表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
42				「ちっとも気持ち悪くないよ。よく見せてくれたね」	A子「涙目で頷く」「先生まな、やっちゃったら先生に知らせます」		A子は、自傷行為をしたときにも相談できる人を得る。
43	34日目。バスで登校。A子「なんか、ちゃんと話したつもりだったのに、最後には「親を困らせてうれしいのか」と言われて、私だって苦しいって言いそうになったけど我慢しました。親がもっと怒ってつらいかなと思って」		親を思いやり、自制できているなあと感じた。逆に言えば、お母さんは自分の気持ちを自分の中に留めておくことができずA子にぶつけてしまうことがあるのではないか。	「発言の先を考えて我慢したんだ。すごいよ」			A子は、母親への気遣いや優しさを理解される。
44				養護教諭から体育教員に、以前A子が体育への移動を不安だと話していたことを伝えた。養護教諭が明日面談してみることにした。		35日目。体育教員から学級担任と養護教諭に話し。A子が体育を見学することが続いている。持病等の事情がなければ体育の授業に参加させたいと思い、A子に声をかけたが「見学させてください」と言うだけで、理由は話さなかった。見学も制服のままでしているが、見学生には運動着に着替えるよう指導している。今後どのようにしたらよいか。	A子は、体育の授業に参加できないという課題を把握される。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
45	A子「体育の授業の前にみんなと一緒に運動着に着替えるときに見られているような気がします」			「着替えの時に見られている感じがして不安なのね。気がするのと実際にそうなのかは別だよ。実際にそうなのかどうかはともかく、何かいい方法ないかな。一緒に考えようよ。例えば着替えの場所を変えるとか」	A子「更衣室以外で着替えてもいいんですか？」と驚いた様子で言う。		
46			着替えの場所は更衣室以外でなければならないと思っている。柔軟性がない。	「場所にもよるけど、どうしても更衣室で着替えなければならないということはないでしょう」	A子「えー、トイレとか？」「行ったことがあるのは、保健室、試食室、和室です」		A子は、物事には複数の可能性があり、選択肢をたくさん持っていていいことを知る。
47			具体的なイメージを想像させる。養護教諭が決めつけず、本人が考えて答えを出すことで、自立を促し、結果本人の成長につながるのではないかな。	「トイレね。他にはないかな。いくつでもアイディアを出してみたら、保健室でもいいよ。体育館に近い方だと試食室かな。和室は遠回りになるかな」	A子「保健室にきていいですか」		A子は、課題解決のための選択肢を明確にする行動するための具体的なイメージを想像する。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
48	A子「体育しばらく出てないし、運動得意じゃないし・・・」	→	着替えだけでなく、体育実技への不安、みんなの前で失敗したくない思いが強いのかな。	「得意科目ばかりでなくていいんだよ。体育の先生にあなたが不安に思っていることは伝えておくと。とにかく体育に行くときは見学の場合も着替えて、そのうえで申し出ればいいじゃない」	体育教員に見学の申し出をするようになったが、着替えて参加するようになるのは、1年冬季休業後。	体育教員も同様の思いで、着替えや参加を急かさないと確認した。	A子は、体育時の着替え、体育実技へ不安をわかってもらう。
49	37日目。かぜ気味で調子が悪いと訴えた。体温36.0℃、うがいをさせた。昼食は残さず食べた。体調が悪いから明日のウォークラリーに参加するのは無理かもしれないと、会話の中で何度も繰り返す。	→	ウォークラリーに参加するのがいやなのだろう。	養護教諭と一緒に救護車で移動してもいいし、家庭科教員の手伝いをしてもいいし、自分にあった参加の仕方をすればよいと伝えた。	翌日、登校直後保健室に来て養護教諭にウォークラリーに参加すると話した。		
50	38日目。ウォークラリー終日参加。B子、C子、D子と一緒に歩いた。さらに昼食の時には、S子、T子、U子等同じクラスの女子が加わって10人ぐらいの人数で食べていた。	→	無理に明るくして、頑張りすぎているように見えた。この行事のあと、疲れて欠席しなければよいと思った。しかし、参加できたことはA子にとって大きな自信となるのではないかな。			放課後、職員室で情報交換をしたところ、学級担任をはじめ他の教員も養護教諭と同じ思いで見えていた。	A子は、行事に参加し、集団の中で過ごす経験を積む。
51	39日目。A子「ウォークラリーに全部参加できてうれしかったです。来週は体育にも出てみようと思います」						

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
52	A子「好きなんですけど、できすぎの兄を持つとつらいです。親も祖母も兄ばかりかわいがります。比べられるし」とぼつりとこぼすように話した。		劣等感が強く、自己肯定感の低さを感じた。学級担任に報告。後日保護者と面談する機会に養護教諭も同席し、話をしてはどうか。母親や祖母を責めるのではなく、とにかくA子の日常の中のこまごました行動もほめたり、お礼を言葉にして伝える機会を家庭の中で増やしてはどうか。	後に母親との面談の際に伝えた(83ーエへ)。			A子は、家族関係を話すことができ、わかってもらえる。
53	4 1 日目。朝、胃のあたりが気持ち悪かったので遅れてきたと話す。顔色がいつもより蒼白い。表情が硬い。4 校時体育見学。		先週体育に参加してみる(5 1 ーア)と自分で言ったことが、プレッシャーになっているのではないかと。ウォークラリーに参加したこと、昨日終日教室で過ごしたことで疲れているのではないかと。	積極的な働きかけせず、見守る。			A子は、元気がないときも見守られ、ペースが守られる。
54			養護教諭は、登校の方法をこちらで指示するのではなく、A子が自分で自分の状態や親や周囲の状況を判断して行動できることがA子には大切ではないかと思った。	長期的に登校手段も含めて自分で判断し、行動できるよう自立を促していく支援をしていきたいがどうかと学級担任に話した。		4 2 日目。学級担任は、このごろ車で送ってもらえることが多いようだ。お母さんも大変だから、朝バスで来るようにA子に話した。	養護教諭が学級担任の焦りを把握し、働きかけることで、A子は、自分のペースが守られる。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
55	A子「昨日のお昼、お弁当を食べている時、グループが盛り上がりすぎて、私のせいかな？私はこの人達にとってうざい？と感じてしまったの」		食事の際の沈黙を自分が原因だと考えるのは、自己肯定感の低さの表れではないか？自己肯定感の低さとは別に、食事をとりながらの会話はかなり高度なコミュニケーション技術を必要とするのではないか。（31ーウと同じ）少しずつ保健室で食事をとるときに、経験を積ませていくしかないのではないか。時間がかかりそうだが。	「グループで食べたり、二人で食べたり、にぎやかな時もある、いろいろなパターンがあっているよ」			A子は、自分だけではどうしてもできない課題（自己肯定感の低さや友人とのコミュニケーション能力の低さ）を養護教諭に把握される。
56	45日目（月）から48日目（木）かぜのため欠席。49日目バスで登校。顔色もよく、体調回復した様子。		養護教諭はバスで登校したこと、自分で参加する授業を決めて行動した今日の様子から来週は大丈夫と感じた。		翌週月曜、休まず登校。	学級担任は、来週また月曜から欠席するかもしれないと心配していた。	A子は、養護教諭に信頼される。
57	55日目。養護教諭出張、不在。A子は、登校してすぐに試食室へ行ったが、家庭科教員が授業中で入れず、職員室へ行き、学級担任に知らせ、開けてもらった。昼休み 試食室で学級担任と昼食を一緒に食べた。				昼食の時は学級担任に犬の散歩のコースなどを笑顔で話した。	学級担任の報告では、学級担任も急かすような言葉がけをしないように気を付けた。	

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
58	58日目。A子「頑張っているんだけど、授業に全部参加できる日と参加できない日があります」「体育はまだ参加できません。見学のお願いは時間ごとに体育の先生にしています」「すみません」「着替えのこととか前に先生と一緒に考えてくれたのに結局できなくて」		体育の着替えの件、養護教諭の働きかけがブレッシャーになっている(45～48)。養護教諭自身の対応を見直さなければと思った。遅刻をしてきた日も、A子なりに考えて、頑張っていることがわかった。何日かに一度でも授業に全部参加できる日があるのは、確実に前進しているのではないかな。	「それは、謝る必要はない。最初から完璧にやろうとしないで、たくさん失敗して、その度にやり直してかまわないからね」			A子は、自分なりの頑張りを養護教諭に再認識され、養護教諭の対応の見直しを促す。
59	60日目～64日目。授業は全て参加。昼休みは保健室で過ごす。		教室で全部過ごした後には2日以上欠席があったが、昼を保健室で過ごすパターンになってから、欠席が少なくなっていることから、授業に参加し、保健室で昼休みを過ごすという自分のペースができたのではないかな。昼休みを保健室で過ごしているのは、食事のことだけでなく、午後に備えて休養し、エネルギーを蓄える効果があるのではないかな。				A子は、学校での生活リズムをわかってもらう。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
60	6 5 日目。欠席。学級担任から家に電話連絡した。本人と電話で話をした。母親は朝早くから仕事に行き、A子はバスで登校する元気がなかったため休んでしまったとのこと。犬の散歩はした。		学級担任に電話でバスで登校する元気がなかったことや犬の散歩の話をしていることから、担任に対する以前のような緊張感が薄れているのではないかと。学級担任も急かす言い方が減り、A子とうまくコミュニケーションをとることができるようになっていいると感じた。			学級担任から家に電話連絡した。本人と電話で話をした。	
61	6 7 日目。6 校時は、学年で構成的グループエンカウンター（誕生日の輪、自己紹介、他己紹介）を実施する予定なので、昼休みに内容と養護教諭が進行役を務める説明をしたところ、見学したいと話した。		無理に参加させない方がよいのではないかと考えた。	「一緒に会場に行って、A子さんは見学していていいからね」と声をかけた。	会場に行ったところ、学年の生徒全員、1 学年関係教員が全て参加することを知り、「やっぱり参加します」と言って集団の中へ。楽しそうにしていた。	学年2 学級の規模にもかかわらず、1 組はいいな、2 組はいいなと自分のクラスへの不満を言い、他のクラス（科）をうらやましがする生徒が複数いて学年会議で話題になり、例年クラスごとに実施していた内容を「あなたと仲良く、みんなと仲良く」というタイトルで学年全体が仲間だと実感できるような内容に変えて、教員も参加して行った。	

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
62	A子は参加後、「なんか、知り合いが増えました。同じクラスの人でもよく知らなかった人とかいて、今日知ってよかったです」と話した。以降、冬季休業まで、授業全て参加。	→	学年で構成的グループエンカウンターエクササイズに参加するとは思っていなかったのが驚いた。しかし、学級や学年の子どもたちに集団の中で受け入れられる経験をしたことは、A子の自信につながるのではないかと考えた。				A子は、学級や学年の子どもたちに集団の中で受け入れられる経験をする。
63	83日目、84日目。両日ともに球技大会。当日本人が、競技には参加せず、保健室で自習をしたいと申し出た。	→	体育の見学も続いており、運動が苦手ということで、競技への参加はしたくないのではないかと。着替えのプレッシャーの件もあり、養護教諭が先導するような働きかけを控えている。	学級担任、体育教員と相談のうえ、無理に参加せず、自習をさせた。			A子は、自分の状況を理解される。
64	C子、D子、S子がクラスの応援に行こうと誘いに来たときには、一緒に行った。	→	教員が特別な指示をしなくても絶妙なタイミングで声をかけたり、誘ったりしてくれるC子、D子、S子の存在はA子にとって大切だと思う。		誘われるとうれしそうに出かけ、戻ってからも楽しそうにクラスの勝敗を養護教諭に報告していた。		A子は、同級生と交流する機会を確保する。



表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
65	冬季休業。全員参加の冬期講習（8日間）では、最終日のみ欠席。それ以外はすべて参加した。養護教諭と廊下や玄関で会ったときにも、自分からあいさつをしていた。保健室利用なし。		夏休みも講習の後半から休んで、夏休み明けに欠席が続く、頑張りすぎるとその後欠席が続くというパターンが見られ、それに伴って、気分の波があるので、養護教諭は、A子が本当に調子が良いのか疑問があった。			学級担任も教科担任も冬期講習の参加状況について喜んでいた。	A子は、今の状況だけでなく、これまでの様子も併せて理解される。
66	86日目。始業式。欠席。冬休みの後半から、眠れない、怖い夢を見ると度々訴え、今日は顔色も悪く目の下の隈も目立つとのこと。ここ3日は犬の散歩もしていないとのこと。	母親から学級担任に電話連絡有り。	今までにない症状「眠れない、怖い夢を見る」が出ていること、このまま眠れない日が続くのはA子の心身に負担がかかることから専門医の受診を勧めることにした。	心療内科、精神神経科等複数の医療機関を紹介するメモを用意した。		学級担任から母親に連絡した。	A子は、適切な医療を受ける機会を保証される。
67		母親は、「今週この状態が続くようならば、病院でも何でも連れて行くつもりでいました。行くときは、近隣の〇市にある神経内科に連れて行くつもりです。受診したら、学校に連絡します」と担任に話した。	母親が既に受診する病院を決めているということは、やはり、今までにない心配な状態なのか？				

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
68	89日目。欠席。	母親から学級担任に電話連絡有り。「昨日、診察を受けました。軽い睡眠薬を処方されましたが、特に治療は必要ないと言われました。来週から登校させます」					
69	90日目。顔色はよく、緊張も見られない。		落ち着いて話しができそうな様子。	保健室で養護教諭と面談。途中学級担任も同席。	A子の話し・年が明けてから気分が落ち込んだ。・中学の時に自分を無視した人のグループに外出先で会って、いやな気分になった。・親戚の年下の女の子が、いつも新年遊びにくると一緒に遊んで過ごしていたのに、髪を金髪に染めて、全然話しも合わなくなってとてもショックだった。・母親が、パート先が倒産して、仕事がなくなったことでイライラしていてしょっちゅうケンカをして、リスクもその度にやってしまった。・冬期講習には頑張ってたけど、最後の日だけ休んでしまった。・そのあたりから、眠れなくて、寝ても怖い夢ばかり見て、つらかった。		

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
70			養護教諭も学級担任もA子が講習を休まず、保健室も利用せずに頑張っていた陰で、大変な思いをしていたことに驚いた。A子は養護教諭や学級担任に心配をかけないようにしたい、期待を裏切らないようにしようと思っていたのでは？	「冬休みはA子さんが眠れなくなるくらい、いろいろなことがあったんだね。夏休み明けと同じように、保健室登校からゆっくり始めましょう」と声をかけた。			A子は、自分なりの頑張りを養護教諭に再認識され、養護教諭の対応の見直しを促す。
71	「お医者さんは、とても優しい人でした。お医者さんに話を聞いてもらって、薬を飲んだらとても楽になった病院には2週間たったらまた行きます」		特に、医師について、優しく、いい人だったと話したときには、安心した様子だった。	学級担任と相談し、母親と面談する機会を設けることにした。早速、学級担任が連絡し、母親が来校し、面談した。			

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
72		<p>母親の話・信頼できない医師でした。2度と連れて行きません。 （本人の診察の後、母親と医師の2人で話しをしたとのこと）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・（A子はとても良い先生で楽になったと話していたことを伝えると）「私からよく言い聞かせます」と興奮気味に強く言い切った。</li> <li>・パート先が倒産して、新しい仕事を探すのが大変だ。</li> </ul>	<p>母親は医師に何か嫌なことを指摘されたか、学校には伝えたくない診断名が出されたか？ 母親が嫌がって、病院を変えようとしても、A子の今後の症状を見て、必要ならば医療機関との連携も考えていく必要があるのではないか。しかし、母親の気持ちにも配慮して慎重に対処する必要があるのではないか。仕事のこともイライラの原因？</p>		<p>その後、症状の継続も悪化もなく、高校在学中は、2度目の受診はなかった。</p>		
73	<p>9 1 日目。英語教員が昼休み養護教諭に用事があり、保健室に来室した際にA子に「元気になったか？また、英語一緒に勉強しような」と声をかけた。A子は「はい」と返事をしていた。</p>		<p>冬季休業明け、授業初参加だったが、緊張や興奮の様子もなく淡々としているように見えた。前日に英語教員から声をかけられたことが、プレッシャーになったのか、良いきっかけになったのかかわからない。</p>		<p>9 2 日目。英語の授業に参加。9 3 日目からさらに参加する授業が増えた。</p>		

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
74	93日目。1校時～4校時鞆は保健室に置き、必要な道具を持って教室へ授業に参加。昼休み保健室で昼食をとった。すぐ帰らず、母親に14:00に迎えにくるようお願いしたのでそれまで読書をしたと申し出た。		6時間授業に参加できているわけではないが、自分で授業参加に挑戦したり、昼食を持ってきて、学校で過ごす時間を長くしたり、A子なりに学校生活に参加しようとしているのではないか。				A子は、一見マイナスに見える状態でもA子なりの頑張りがあることをわかってもらう。
75	100日目。欠席。	母親から学級担任に電話連絡有り 「実は、昨日、A子の携帯電話を取り上げました。今回、△万円以上の料金の請求があり驚きました。パソコンも時間を決めて使わせません。そのことできつく注意したことと、私の方も仕事が決まらないことや家のことでイライラして、A子とケンカしてしまい、かなり言い過ぎまして今朝も部屋からA子が出てこない状態です。来週は必ず学校へ連れてきますので、よろしくお願いします」	母親のイライラがA子に大きな影響を及ぼしている？母親がイライラした気持ちをぶつける相手がA子しかない？A子が携帯電話をたくさん使ったのには何か理由があるのではないか？				A子は、母親に大きく影響を受けていることを理解される。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
76	101日目。元気がない。左手首にサポーターをつけている。A子「先週、学校を休んだときに親と大げんかしてちょっといつもより強くリスカしてしまって、血が出ていたのでサポーターで隠してきました」			「ひりひりするでしょ。手当てしようね」と声をかけ、傷口を清浄綿で拭き取り、傷用軟膏を塗布した傷用パッドをはる処置をした。	処置が始まると自分から話し始めた。		A子は、傷の処置を受けることで、安心して話す。
77	A子「あ、でも、私もかなり反抗して親を怒らせてしまったので、それで言ったと思います」少々都合悪そうな様子で。		自分の言動を省みることができているな。				A子は自分の言動の振り返りができていることを理解される。
78	A子はパソコン部に所属していたが、ほとんど活動に参加していない状態だった。		A子に何か自信を持たせたい、好きなパソコンをいかせないか。 (12-Uと同じ考えから)	放課後、学級担任と養護教諭がパソコン部の顧問に相談してみた。		パソコン部の顧問は、好きなパソコンをいかして高校在学中にたくさんの資格取得を目指してはどうかと声をかけ、指導もすると話していた。声をかけるタイミングは、2月の授業の参加状況等を見て後日決めることにした。(84-Eへ)	A子は、授業以外の場で活動する機会を保証される。
79	107日目。スキー教室 見学。家庭科教員の指導のもと、他の見学者と共に自習課題に取り組んだ。					担任から：スキー場までの移動のバス車中ではD子と並んでおしゃべりしながら過ごしていたとのこと。	

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
80	108日目。養護教諭に昨日のバス車中でD子とたくさん話しをして楽しかったことなどを話す。						
81	110日目。3校時保健室で運動着に着替えて、体育館へ、体育の創作ダンスの授業に参加。	→	新しいことに挑戦するための、A子なりの準備期間があるようだ。自分で参加しやすいタイミングを見計らっている。失敗を恐れているのではないか。		以後、同様に体育の授業に参加する。	体育教員の話：1月の下旬から、創作ダンスのグループ分けをして、見学者も自分のグループの近くで見学するようにしていた。A子はS子、T子と一緒にグループで、2人にはあらかじめ、振り付けを考えるとときなどA子も交えてやるように指示していた。S子、T子がよく声をかけて、一緒に発表会に参加しようと誘っていた。今日は一生懸命創作ダンスの練習に取り組んでいた。今日のグループの様子を見る限りでは、発表会も参加できるのではないか。創作ダンスは、球技より参加しやすかったのではないか。とにかく着替えや参加を急かさず、待ってよかった。途中、何度も強く言いそうになった。	A子は、ペースを守られ、急かされることなく新しいことに挑戦することができる。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
82	113日目。	A子が6校時の授業を受けている間に、母親に来校してもらい、学級担任と養護教諭の3人で面談した。母親の話し ・パートが決まり、3月から働く。 ・兄との比較をしているつもりはない。 ・義母も孫達をかわいがってくれている。 ・父親とA子の会話は少ない。 ・左手首に時々傷があることは中学校の時から気がついていて、時々やめるように声をかけていた。				学級担任の話し・お母さんも毎日の送迎、本当にお疲れさまです。・創作ダンスにも参加してずいぶんA子さんは頑張っている。・厳しい話をひとつ、3月の成績会議で2年生への進級のことが決まりますが、保健室で自習した時間等を授業に出席したものとして扱ってもらえるようお願いをしますが、実際に進級できるかどうかはまだわかりません。	A子は、家での状況を理解される。
83		母親の話：・私もイライラするとついA子に言い過ぎることばかりで、ほめるとかありがとうと声をかけることが少なかったかもしれません。・家のことも手伝ってくれるし、いいところいっぱいあるんですよ。		養護教諭から提案：・A子さんは、お母さんが好きで、認めてもらいたいという思いが強いので、とにかく日常の小さなことも、ほめたり、お礼を言ったり、言葉にしてこまめに伝えるようにしてみてもどうか。（52ウから）			A子は、養護教諭と母親が連携することでA子が安心して過ごせるようになる。



表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
84	114日目。翌週から昼休みや放課後に情報処理室でパソコンに向かい、検定の練習をするA子の姿とたびたび見かけられるようになる。パソコン部員達と接する機会が増えた。この週から、昼休み以外は全て授業や行事に参加した。			パソコン部の顧問に連絡し、A子に話をしてもらった。(78ーカより)		顧問は、好きなパソコンをいかして高校在学中にたくさんの資格取得を目指してはどうか、昼休みでも、放課後でもいつでも情報処理室で待っているよと声をかけた。	A子は、授業以外の場で活動する機会を保证される。
85	2学年夏季休業前。・初日から授業には全て参加・体育の着替えは、保健室で・昼休みは保健室で過ごす・通学方法は、母親の仕事が朝、早い日は、自転車またはバス、それ以外は母親の車で・パソコン部の活動継続・欠席 4月：1、5月：5、6月：1 ・養護教諭不在日10日、全て出席し、試食コーナーを利用・4月下旬、母親が2月から預かっていた携帯電話をA子に再度持たせた・以前は、父親の本棚から本を借りるときには、黙って借りていたが、一言ことわってから借りるようになり、父と本について短い会話をするようになった。養護教諭に、「今度、この本を読むんですけど、これは父が大学生の時に読んだ本で・・・」などと、話しをすることが度々あった。・6月下旬には、球技大会にも参加した。	クラス替えなし。				学級担任が替わった。学級担任が昨年度までの事情をよく理解して対応していた。1学年のときにも社会の教科担当者としてA子に関わっていた。	

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
86						他の教員から、ここまで授業や行事に参加できるのなら、昼休みも教室で過ごせるように強く指導したほうがいいのではないかという意見ができた。	
87			養護教諭としては、保健室で昼休みをすごしているからこそ、授業や行事にどうにか参加できているのではないかと考えていた。	球技大会の翌週A子と養護教諭面談「4月からずいぶん頑張っているよね。最近、困っていること、しんどいことはないかな？」	A子「10分休みは教室にいても平気だけど、昼休みは苦手です」「グループでご飯食べたり、食べた後もいろいろ気を遣いながらおしゃべりしたり、そういうのがちょっと」「保健室で昼休まないで、1日授業に参加できないかもしれません」	学級担任もA子は今の状態で精一杯ではないか、この上昼休みも教室でコミュニケーションをとれるように強い指導をすることは現時点では無理ではないかと考えていた。	
88			養護教諭と学級担任が考えていたとおりの状況だった。	他の教員に状況を説明した。		甘えではないかという考えの教員もいた。	A子は、自分のペースを守られる。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
89	夏季休業中。全員参加の夏期講習の前半は全て参加した。後半は欠席した			学級担任、学年主任、養護教諭、生徒指導部長、家庭科教員で昨年と同じ時期に同じように休みだしているの、夏休み明け早急に家庭との連絡を密に取りながら、対応していくことを確認した。		学級担任の話では、クラスの間関係は特に変化が見られないので、家庭で夏休み中何かあったのではないかと。	
90	2年夏休み明け3日目。欠席。	母親から学級担任に電話連絡有り。母親の話：・8月に東京の祖母の家に、A子、E子、E子の高校の友人2人で3泊4日の日程で遊びに行き、帰宅してからA子がひどく落ち込んでいる。・部屋にこもって、携帯ばかりさわっているの取り上げた・友人達との旅行がうまくいかなかったの、11月の修学旅行には参加できないと話している。	本当はE子と2人でいきたかったのかな？今回の旅行は修学旅行の練習のつもりだったのかな？旅行の練習をさせたかったのは、母親か？	学級担任と話し合い：修学旅行のことを今決めなくて良いから、また、休み明けの保健室登校から始めて、ぎりぎりに結論を出せばいい。まず、学級担任から電話連絡をする。登校できないようならば、学級担任と養護教諭で家庭訪問をしよう。			
91	2年夏休み明け4日目。欠席。					学級担任から本人に電話連絡：修学旅行のことは今、決める必要はなく、部屋で何日悩んでも解決しないから、学校に出て、一緒に考えよう。	

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
92	2年夏休み明け5日目。緊張はないが、元気がない様子。			「理由があつての欠席でしょ。どうした？」	A子「夏休み中に、東京のおばあちゃんの家で、E子とE子の友達2人と一緒に行ったんですけど、E子以外の2人が勝手に、わがままで、おばあちゃんやおじさん、おばさんに迷惑をかけてしまい、でも、E子の友達だし、強く言えなくて、すごく大変だったんです」		A子は、欠席には自分なりの理由があることを理解される。
93				「お母さんからの電話では、帰ってきてから、部屋にこもって携帯電話にばかり触っているから、お母さんが預かったという話だったけど、A子さんの話しも聞きたいな」	A子「その通りです。また、携帯取り上げられちゃいました。あつ、でも先生、リスクはしなかったんですよ」		A子は、一見マイナスに見える状態でも自分なりの頑張りがあることを理解される。
94	A子「そんなに前からではないんですけど、今回4人の旅でもダメだったから、修学旅行無理かなと思ってしまいました。それなのに、なんか、親がはりきっていて、修学旅行は絶対に行きなさいとか言うので、けんかしちゃいました」			「学級担任の先生からも話があったと思うけど、修学旅行に参加するかどうかはまだ決定しなくていいから、ぎりぎりまで考えて、お母さんとも話し合って、後悔しない結論をだそうよ」			A子は、修学旅行の参加について、焦らず、結論を出すまでの期間を保証される。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
95	2年夏休み明け12日目。この日以降：・授業には全て参加。・体育の着替えは、保健室で。・昼休みは保健室で過ごす。・家庭科の調理実習の際には、食事は班のメンバーと食べた。・パソコン部の活動継続。・欠席 9月：1、10月：0、11月：2、12月：2	→	夏季休業前の調子に戻ってきた様子。調理実習の後、食事を班の人と食べることができたのは、試食室という場所が保健室と同様に過ごしやすい場所だったからではないか。保健室登校から教室に行くまでの気持ちの切り替えの期間が短くなっている。				
96	10月中旬。養護教諭1週間不在。昼休み試食室で家庭科教員と過ごした。この週にウォークラリーが実施されたが、終日参加。						
97	10月下旬：修学旅行の参加について話し合い（A子、母親、学級担任、学年主任）。	母親は、絶対に修学旅行に参加させたいと主張していた。	→ 母親を超える経験。A子にとって大きな意味があるのではないかな。	→ 学級担任と養護教諭は修学旅行の参加についての話し合いに備えて、A子に気持ちを確認し、感情的にならず、こういう理由で不安だから行きたくないのだと伝えることができるように、事前に準備させていた。	A子は・海外旅行であること・女の先生がいけないこと・5日間も友達と昼も夜も過ごせるかどうか この3点が不安だから行きたくないとはっきりと主張した。最終的に参加しないことに決定した。		A子は、言葉で気持ちを説明し、母親に理解してもらおう経験をする。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
98	冬季休業中、冬期講習休まず参加。保健室利用なし。2年冬休み明け1日目。始業式欠席。	母親から学級担任に電話連絡あり。母親の話・昨夜、緊張してほとんど眠れなかったようだ。・冬休みの後半から、進路のことでもめていた。・家族と一緒に食事をとることも避けて、部屋から出てこない状態が続いている。・休みで帰宅していた兄が声をかけても返事もしない。	学級担任と一緒に家庭訪問をしようと思った。				
99	2年冬休み明け6日目。欠席が続いている。	家では母親が一人で対応した。		学級担任と養護教諭が家庭訪問。			
100	A子は「ごめんなさい。ごめんなさい。今日はまだ先生たちに会うことができません。クッキーを作りました。食べてください」というメモとクッキーを皿に用意して姿を見せなかった。	母親の話では、A子は、母親が仕事に出かけている間に台所の洗い物やちょっとした家事をやってくれているが、家族と一緒に食事をとろうとしない。今日もドア越しに母親が声をかけたところ、「先生たちにクッキーとメモを出して」とだけ答えたとのこと。					

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

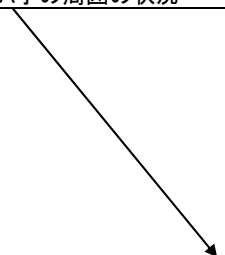



	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
101			学級担任と養護教諭は、A子に直接会うことはできなかったが、クッキーとメモを用意していたこと、家の手伝いをしていることから、A子はまた保健室登校から始めて、授業に参加できるようになるのではないかと考えていた。	担任と養護教諭の2人で「クッキーごちそうさま。おいしかったです。また、いつものように休み明けのスタートをしましょう。進路のことも一緒に考えましょう」とメモを母親に託してきた。	家庭訪問の2日後、家族を避ける態度が和らぎ、一緒に食事をするようになった。	しかし、他の教員からは、「家庭訪問したときに何としてでも本人に直接会うべきだった」「これだけ欠席が続くのなら、これまでの休み明けより状況は悪いのではないか」「3年生への進級は難しいのではないか」等の意見が出された	A子は、養護教諭と学級担任に信頼される。
102			家庭訪問をされたくない理由は何なのか？	 		その後も欠席が続いたため、翌週、担任が、再度家庭訪問をしたいと母親に伝えたところ、必ず数日中に本人と一緒に学校に行きますので家庭訪問はしないでくださいと言われた。	
103	2年冬休み明け23日目。夕方、保健室に母親とA子が来室。最初は母親の後ろに隠れるようにしていたが、保健室のドアを開けたとたんに養護教諭に抱きついて声を出して泣いた。		本当はお母さんに抱きついて泣きたかったのかな？養護教諭に会いたかったのかな？			学級担任、養護教諭、家庭科教員が対応した。	A子はありのまま受け入れられる。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
104	顔に打撲の跡があったので、泣きやんでから話を聞くと、母親ともめているときに言葉がうまく出てこなくて、いらいらして壁に体当たりしたり、リビングの少し高いところから飛び降りたりして、腕、腰、顔いろいろなところにあざができたらしい。それを先生たちに見られたくないと思ったから家庭訪問のとき会えなかったとのこと。また、母親も恥ずかしくて先生方には言えませんでしたと話した。その時は、E子からの電話にもでず、犬の散歩も行かなかったとのこと。			家にこもってばかりでは同じことの繰り返しになるので、学校に来て、進路のこともいろいろ調べて検討しましょうと提案した。	翌週から保健室登校。		A子は登校するきっかけをつかみ、再び自分で課題と向きあい、解決していくことを保証された。
105	3月2週目から授業に参加する時間が増えた。			「もし、今後、今回のように欠席が続いたら、20日も待たずに部屋まで会いに行くよ」と声をかけた。	A子「はい。いつでも先生がきてもいいように、部屋を掃除しておきます」と笑顔で答えた。		A子は、養護教諭との信頼関係を深める。
106	進路については、ペットに関わる仕事の資格を得られる専門学校に進むという方向で目標が定まった。					進級認定会議では、1年生のときに比べ、欠席日数が多いことなどから進級に反対する様々な意見が出たが、最終的に3年生になることが決まった。	A子は、将来を見据えた配慮のうえ、高校生活の継続を保証される。



表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
107	3年生初日。バスで登校。登校後すぐに泣きながら保健室へ。		春休み中に何か特別なことがあったかな？それとも3年生としての学校生活に対する緊張や不安かな？	ベンチタイプのいすに並んで座り、背中に手を当てて、「我慢しないで泣きただけ泣いてスッキリしてからお話ししよう」と声をかけて見守った。	A子「うーん、（涙が出る理由）特に思い当たることはないです。何だかよくわかりません」と話す。		A子はありのまま受け入れられる。
108	3年生2日目。バスで登校。登校後保健室へ。昨日のような泣く様子はないが、不安な表情。A子「ここに鞆置いていいですか」		基地としての保健室、しばらく続く？				A子は、新しいことに挑戦する時に、いつでも戻ることでできる場所を確保する。
109	3年生9日目。昼休み来室時、いつもの場所に座った途端に涙ぐんだ。英語の授業中に指名された問題がわからなくて、頭の中が真っ白くなり、何も答えられなくなったとのこと。		午後保健室で過ごしたいと言うのかな？	A子の話を聞いた。	養護教諭に話して、少し涙を流したら、午後の授業の時間を気にして、食事を食べて、鞆を持って教室へ。		
110			午後の授業に行くことができるとは、気持ちの切り替えが1、2年次より早くできるようになったなと感じた。				
111	3年生14日目。放課後、来室し、明日の専門学校説明会に参加する予定だが不安であると話す。				3年生15日目。専門学校説明会に参加。	引率した教員の話：メモをとりながら積極的に質問していたとのこと	

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
112	7月の学校祭では、準備期間中から4日間、D子やS子等の学級の友人と昼食と一緒に食べた。そのことを養護教諭に「うれしかった」と報告していた。						
113	学校祭の7日後に行われる、野球の全校応援には参加できないと学級担任に申し出た。			学級担任と養護教諭が一緒に話をきいた。			
114				「A子さん、学級担任の先生は、これまでのことを振り返って、あなたが理由もなく出たくないと言っているから、聞いているのよ。これを言ったらいけないかなとか考えなくていいから、今、思っていることを素直に伝えていいのよ」	A子 「学校祭の準備のときから、周りとうまくやるためにいっぱいいっぱいでした。授業は何とか出ているけど、今は行事は無理です。すみません」	学級担任「そうか、かなり頑張って学校祭に参加したんだな。それは、よかった。それじゃあ、野球応援には参加しないで、課題用意して学校で自習するのはできるか？」	A子は、自分なりの理由があって、担任に申し出たことを理解される。
115			1年生、2年生からの経過から考えると、決してわがままとか甘えではないと思われる。担任の考えを尊重して今後も指導してはどうか。	当日は、学校で自習。学校待機の家庭科教員にA子の自習監督をお願いした。		学級担任が、職員会議で話をしたときには、「出たい行事を選んでいるのではないか」「わがままではないか」「A子なりに精一杯、調整しているのではないか」等の意見が出された。学級担任：1回1回の出来事に注目するのではなく、2～3ヵ月の少し長い目で見てほしい。	A子は、自分のペースを守られる。

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
116	野球応援から3日後。A子「先生、私、いつも夏休み明けに学校を休んでしまうので、夏休みの後半に自分だけの出校日を作ろうと思います。先生の都合のいい日に保健室で勉強してもいいですか？」		修学旅行以降は、養護教諭が先導したり、選択肢を用意したりする頻度が減り、待つ、見守ることが多くなっていると感じた。	「自分なりに夏休み明けに備えようという計画ね。協力するよ。ただし、3年生は進路関係の出校日も多いから、負担が大きすぎる計画にならないように注意してね」 養護教諭とA子 予定表を見ながら日程を決めた	夏休み中。夏休みに入っすぐに、A子は専門学校の見学会に母親と県外へ出かけた。A子も母親も実際に学校に行き、説明を受けて安心したと学級担任に報告があった。学年が企画した就職希望者向けのビジネスマナー研修会に2日参加した。自分決めた出校日に保健室で3日自習した。		A子は、自分の考えを養護教諭に話し、協力を得る。
117	夏休み明けも休まず保健室登校からスタートした。すぐに翌日から数時間ずつ授業に参加し、翌週からは昼休みのみ保健室で過ごし、それ以外は教室で過ごし始めた。						
118	12月。父親が職場を解雇された。そのため県外で一人暮らしの予定が、寮生活することになった。その後3人部屋の寮ということで不安を訴えるようになった。		不安な気持ちにばかりとらわれず、自信をつけて卒業してほしいと思った。	パソコン部の顧問に相談した	2月下旬まで様々な試験にチャレンジした。	パソコン部の顧問が春からの新しい生活は今考えていてもなるようにしかないのだから、それより卒業までチャンスのある資格試験を全部受けてみなさいと声をかけた。	A子は、不安な気持ちを聞いてもらい、悩みながらも家にこもるのではなく、部活等の活動をする経験を積む。
119	2月初旬3年生出校日。帰りに保健室へ。A子は寮生活のことで母親ともめて「それなら学校へ行くのをやめなさい」といわれて、3年生になってから一度もやっていなかった手首に傷をつける行為をしてしまった。						

表2 高校1年生女子A子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア A子の状況	イ A子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ A子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
120	A子は寮生活のことで母親ともめて「それなら学校へ行くのをやめなさい」といわれて、3年生になってから一度もやっていなかった手首に傷をつける行為をしてしまった。今日は、吐き気がして泣きそうで、つらかったけど、出校日の日程が半日だし、学校に来ることも、後5～6回しかないなと思ったから出てきましたと話す。		体調が悪くても、泣きそうな気分でも、自分の意思で学校に出てくることができるようになっていくなあ。				A子は、一見マイナスに見える状態でもA子なりの頑張りがあることをわかってもらう。
121	卒業の日。母親は朝から涙が止まらない状態。帰りに保健室に寄ったときに、A子は冷静にしていたが、母親を先に車に行かせて、母親が保健室からいなくなってから泣き出した。		これまでA子が積み重ねてきたことを確認して、自信を持って、堂々と卒業してほしいと思った。	A子に次のことを話す。A子はもう中学生のA子ではないし、高校1年生2年生のA子ではない。悩んでいるときは、部屋にこもっているより、犬の散歩をしたり、友人と遊んだり、資格試験のために練習したり、悩みながらも行動した方がよかったことも今までに経験済み。県外では、同じ職業を目指す人たちと学ぶことができるし、中学、高校時代とは違う人との出会いがある。離れたところから家族を見ると、一緒に住んでいるときには見えなかった面に気がつくかもしれない。以上のことを確認して送り出した。	涙を流しながら、真剣に話を聞いていた。		A子は保健室から巣立つ。

表3 高校2年生女子B子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア B子の状況	イ B子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ B子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
1	これまでの保健室利用は無い。服装の乱れ、化粧等で登校指導時に生徒指導部の教員が声をかけることがたびたびある。		表情が暗く、服装が乱れていて心配だと思った。(13-エヘ)	何か課題がありそうな生徒だと思い、気にかけて、あいさつをしたり、雑談をするなどしながら見守っていた。			B子は、養護教諭と顔見知りになり、後に保健室を使いやすくなる。
2	B子の学級で生徒指導上の問題が続き、そのことでB子は学級担任と学年主任に呼ばれて面談をすることになった。		学級で起こった生徒指導上の問題の件で、学級担任と学年主任に呼ばれて、話をするのはB子にとって辛いことだと感じた。(6-エヘ)			学級担任から学級で生徒指導上の問題が続き、そのことでB子と面談をするので同席してほしいと養護教諭に依頼があった。	
3			この状況がB子に今後どのように影響するのかを予測した。学級での立場が悪くなり、友人関係が悪くなって教室に居づらくなるのではないかと思った。(11-エヘ)				
4			強いストレスから体調を崩したりすることが考えられるので、B子が今後保健室を利用しやすくなるような対応をしようと思った。(12-エヘ)				
5			B子が追いつめられないよう、今後、保健室だけでなく、カウンセラー室も利用できるようなつなぎ、安心して居られる場所を提供する必要があると判断した。(12-エヘ)				

表3 高校2年生女子B子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア B子の状況	イ B子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ B子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
6	★学級担任、学年主任、養護教諭、B子の4人で話をした。B子は緊張して、硬い表情で面談を行う部屋に入ってきた。		入室時の様子から、やはりこの面談はB子にとって辛いことだと思った。	B子の不安な状態に寄り添うため、B子に養護教諭の隣に座るよう促した。養護教諭はB子の左隣に座った。 (2ーウより)			
7			気持ちを和らげて、少しでも楽に話ができるようにしてやろうと思った。	「大丈夫だよ」と声をかけて座らせた。	少しほっとした表情になった。		B子は少し緊張から解放され、安心する。
8			B子の辛い心情を思いやり、面談では生徒指導上の問題についてどのような話が出てB子を尊重しようと思った。	B子が言葉に詰まったときには「ゆっくり話そうね」と声をかけた。	学年主任と担任の問いに時々、言葉につまりながらも答えた。		B子にとっては、自分で考え、話すペースが守られる。
9	学級担任の話を聞いて「私はやっていません」と話す。話をしている間、足を動かし、手は左手人差し指に右手親指の爪を立てる動きを繰り返す。		「やっていません」と話しながら、本人の落ち着いた様子から複雑な背景があると判断した。生徒指導部と連携し、慎重に対応する必要があると思った。	面談後、生徒指導部長に問題行動としての扱いを待ってもらようよう調整し、生徒指導部、相談員との連携を促し、B子をチームで支援する体制を整えた。			B子は自分で課題と向き合い、解決していくことを保証された。
10			相談員（心のアドバイザー）の協力も得て、本人、保護者、学級担任を支える必要があると判断した。	面談後、相談員に電話で経過を報告した。			B子にとっては、支えてくれる大人が増える。
11				この件で、学級で傷つくことを言われたり、いやな思いをしていないかを確認した。(3ーウより)			B子は自分のことを心配してくれる人を得た。

表3 高校2年生女子B子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア B子の状況	イ B子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ B子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
12				いつでも、保健室やカウンセラー室を利用してよいことを伝えた。(4ーウ、5ーウより)			B子は困ったときに行くことのできる場所と相談できる人を得た。
13				もっと自分を大切にしたいことを話した。(1ーウより)	養護教諭の話を聞いているときに涙を流す。		B子の養護教諭への信頼が増す。
14			B子が養護教諭の話を受け入れていると感じた。				
15	爪にマニキュアを塗っている。			この面談の後、保健室でマニキュアを落としてから帰る提案をした。	保健室でマニキュアを落としながら母親との仲について話す。		B子は養護教諭に母親との関係や家庭での立場をわかってもらう。

表3 高校2年生女子B子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア B子の状況	イ B子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ B子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
16	★翌日。養護教諭と話がしたいと学級担任に申し出る。				相談員との面談で、学級の生徒指導上の問題は自分がやったと話す。学級担任にも自分で話したい。家では妹だけがかわいがられている。親を困らせようと思った。母は妹のことを心配してイライラしている。	養護教諭が出張で不在のため、学級担任が相談員に対応をお願いする。	B子は、前日の面談を終えて、養護教諭に本当の気持ちを話そうという行動を起こすことができた。
17					相談員と面談後、学級担任に話をした。	相談員は、B子と面談し、その後、学級担任にB子が話をする場にも同席した。	
18				学級担任からの電話連絡を受ける。		学級担任はB子と面談後、学年主任、生徒指導部長に報告し、養護教諭に電話連絡した。	
19	★2日後。6校時保健室に来室学級担任と話がしたい。		本人が話をしたいと思った機会を逃さず、学級担任と話することが大事だと判断した。	学級担任に取り次ぎ、二人が静かに話ができる場所を用意した。			B子は安心して自分の気持ちを出して話せる学級担任への信頼が増す。
20					問題を自分で何とかしたいので、両親に内緒にしてほしいと担任に話す。	学級担任はB子と面談。	
21		母親はB子が家でも困った子だと学級担任に話した。	母親に困った子だと言われるとは、B子にとって家は居心地のよい場所ではないと思った。			学級担任から保護者へ連絡。	



表3 高校2年生女子B子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア B子の状況	イ B子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ B子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
22	★翌週月曜。1校時保健室に来室。主訴：胃痛、食欲不振、寝不足体温36.2℃、脈68/分		家も教室も今のB子にとっては居心地の悪い場になっているのではないかと思った。	主訴に対して誠実に対応し、ベッドで休養させた。	休養後は胃痛が楽になったと話した。		B子は、問題行動のことに関わらず、ありのままの自分を信じて受け入れられ、症状が回復した。
23			保健室に来たときには、少しでも安心して休養し、考えたり、行動するための力を蓄えさせたいと考えた。	ベッドの横で話を聞きながら、気持ちを言語化させることで、B子の考えを明確にする手助けをした。	週末親と話そうとしたが、うまく話ができなかったので、学校で学級担任と相談員と一緒に居てもらって親と話したいと話した。		B子は自分の考えを言語化し、養護教諭にわかってもらう。
24			問題行動がきっかけになるのは良いこととは言えないが、親子が話をする機会を得ることは今後のB子にとってプラスの要素になるのではないかと考えた。	学校で両親、学級担任、相談員が同席する場を設定できるよう調整した。			B子は自分一人ではできないことを養護教諭に協力してもらい実現へ向けて進む。

表3 高校2年生女子B子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア B子の状況	イ B子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ B子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
25	★翌週水曜。4校時保健室に来室。主訴：頭痛、食欲不振 体温37.0℃、脈98/分、血圧119-64		本日午後の両親、相談員、学級担任との面談に対する緊張から頭痛等の症状が現れていると判断した。今は、休養が必要だと思った。	ベッドで休養させた頭に手を当てて、今はとにかく体を休める時間にしようと言った。眠っている間も見守った。	保健室のベッドで眠った。		B子は、休養し、次の行動に踏み出す力を蓄える。
26	同日午後。両親、相談員、学級担任との面談。今回の問題のこと、幼い頃からの思い等を涙を流しながら話した。	担任が後に養護教諭に報告した様子では、両親ともに表情が硬く、B子に言葉をかけることもなかったとのこと。					
27	泣きながら学級担任に連れられて保健室に移動した。		両親との話がうまくいかなかったのだろうと思った。泣きたくなくぐら、両親にわかってもらいたい強い思いがあるのだなと思った。	B子が思いっきり泣くのを見守り、落ち着いてから話を聞いた。	父親が何も言ってくれなかったことがショックだと話した。		B子は、両親にわかってもらいたい気持ちがあるのに、理解されない悲しみを養護教諭に受けとめてもらう。
28			学級担任の気持ちを受けとめつつ、保護者の立場も理解する必要性を感じた。			学級担任が保護者の態度に憤慨した。	
29			学級担任を支え、学級担任と保護者の関係を悪化させないよう配慮する必要があると思った。	学級担任には、保護者もどうしていいのかわからず困っていることを伝えつつ、今後の対応について話をした。			B子は、自分だけでは整えられない周囲の環境（人間関係）を調整してもらう。

表3 高校2年生女子B子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア B子の状況	イ B子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ B子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
30				養護教諭、学級担任、学年主任、相談員の4名で面談を終えてから打ち合わせをした。		相談員の見立てでは、母親はB子の妹のことで余裕のない状態になっているので、父親がキーパーソンになるのではないかとのことだった。	
31	★2週後木曜。1～2校時保健室休養。主訴：頭痛、口の中がイヤな味がする（幼少期からよくある症状だと話す） 体温36.4℃		両親との話し合い、教室で授業を受けること等に強いストレスを感じて、身体症状が現れたり、情緒が不安定になることが予測されるので、B子にとって保健室での安心できる時間と空間の確保が大切であると思った。	ベッドで休養させ、ベッドの横で話を聞いた。	話をした後、眠った。		B子は、体調の悪い状態をわかってもらい、安心して自分の気持ちを出して話すことができる。
32				強い緊張やストレスに体が正常に反応していることを話した。	少しほっとした表情になった。		B子は、自分の心身の状態を理解する。
33				朝から体調が悪い中、学校に遅刻せずによく来たこと、会えてうれしいことを伝えた。			B子は、ありのままの状態を受けとめられる。
34	★3週後月曜。1校時保健室休養。主訴：口の中がイヤな味がする体温36.3℃自分から午後相談員との面談を希望した。		B子なりに苦しみなながらも、何とかしようとしている印象を受けた。	膝掛けを掛けてやり、ソファで休養させた相談員との面談ができるよう調整した。		相談員面談。	B子は、課題と向きあうための環境を調整され、何とかしようという気持ちを行動に移す。

表3 高校2年生女子B子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア B子の状況	イ B子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ B子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
35	★3週後金曜。6校時保健室休養。主訴頭痛体温37.0℃親と話し合うこと、考えることがいっぱいあって時間がほしいと話す。		親との話し合いを毎晩のように続けている様子がうかがわれた。	ベッドで休養させ、ベッドの横で話を聞いた。	眠らず、ずっと話をした。		B子は、体調の悪い状態をわかってもらい、安心して自分の気持ちを出して話すことができる。
36	★4週後月曜。始業前、保健室前の廊下に鞆を抱えてしゃがみ込んでいた。今日は学校を休みたかったのに、無理矢理母親が送ってきたとイライラした様子で話す。今後の親との話し合いのことで相談員との面談を希望した。		親にわかってもらえないことでイライラしている様子だが、今後のことで相談員との面談を希望する等、積極的に何とかしようとしている気持ちを感じられた。	イライラする気持ちを受けとめるよう話をじっくり聞いた。相談員との面談ができるよう調整した。	徐々に落ち着いてきた。	相談員面談。	B子はイライラする気持ちを受けとめられ、考えを整理する手助けを得て、気持ちが落ち着く。
37	★4週後火曜。卒業式予行に参加せず、保健室へ来室。保健室で自習をしながら、合間に穏やかな表情で学年末の考查を受ける予定や翌日の卒業式に参加するつもりであることを話す。		表情や学習への取組の様子から、今後について何か決心した印象を受けた。	話を聞き、学習の様子を見守った。	考查に向けて熱心に学習した穏やかな表情で話した。		B子は、自分の考えを話し、受けとめられる学習の機会を確保される。
38	★4週後水曜。卒業式前に保健室に来室。主訴：胃痛体温37.0℃。教室に居ると緊張すると話す。卒業式に参加せず、保健室で過ごした。養護教諭の側を離れない。		保健室では、教室での緊張や胃痛を訴えながらも、ベッドやソファで休養しようとせず、養護教諭の後をついて歩く様子から、何か今日話したいことがあるものと判断した。今後の方向性が明確になり、気分がすっきりした印象を受けた。	あたたかいお茶を一緒に飲みながら話を聞いた。	学年末考查は受ける、特別指導を受ける、両親と話をたくさんして、前よりわかってもらえた感じがすると話す。		B子は、これまで悩みながら進んできた過程を経て、今後どうするか自分の考えを養護教諭に話し、受けとめられる。

表3 高校2年生女子B子の事例についての実践記録と対応の意味

	ア B子の状況	イ B子の周囲の状況	ウ 養護教諭の思考・判断	エ 養護教諭の対応	オ B子の反応	カ 備考・その他	キ 対応の意味
39				特別指導中も保健室、カウンセラー室を利用してよいことを伝えた。	退室時「先生、ありがとう。バイバイ」と笑顔で手を振った。		B子は、養護教諭と保健室から巣立つ。
40	★5週後。定期考査受験特別指導を受ける。		生徒指導部主導の特別指導の期間もB子の様子を見守りながら、生徒指導部と学年、相談員の調整の役割を担うことで、指導を効果的に進めることができると考えた。	B子がいる別室に時々行って面談をしたB子や両親、特に母親と相談員の面談ができるよう調整した。	特別指導を素直に受けた。		B子は、見守られながら、困ったときに行くことのできる場所を保証されている。

## 第3章 まとめ

### 第1節 結論

本研究では、養護教諭の日々の生徒への対応について、養護教諭が状況をどのように把握し、どのように解釈して対応したかという養護教諭の思考と、そこから導き出された対応に、生徒がどのように反応したかについて着目した実践分析を通して、養護教諭の対応の意味を明らかにすることを目的とした。その結果、次のような知見を得た。

養護教諭は、生徒のありのままを受けとめ、生徒に起こりうる心身の変化や周囲の人間関係の変化を推測し、生徒が悩みながらも少しずつ進む過程を支えるように心がけていた。例えば、体調を崩した生徒の身体症状に対応すると共に、安心して休養できる場を提供する等し、それによって生徒は自分のペースが守られ、自らを振り返るような変化がみられた。これは①「生徒自らが課題解決していこうとするきっかけをつくる」意味があった。また、生徒が困難な課題を前に混乱している時には、何とかしたいという思いを感じ取り、本人の考えを整理する手助けをする等していた。このことは②「生徒自らが課題と向きあう力を高める」意味があった。そして、生徒のコミュニケーション能力を高めるため、初期は、周囲の人間関係を調整し、その上で本人を交え、人とのかかわる経験を積んでいけるようにする等していた。このことは③「生徒の課題解決能力を高める」意味があった。最終的に、養護教諭は、生徒が自らの課題を主体的に解決することを支援し、生徒の成長を促していた。

### 第2節 今後の課題

本研究では、養護教諭の残っていた記録をもとに実践を分析することで、養護教諭の「生徒への対応の意味」を明らかにしようと試みた。しかし、筆者本人の2事例の分析なので、結果が他の養護教諭と共通するものなのかどうかは、明らかではない。また、生徒への対応の意味を詳しく明らかにしようとするれば、生徒に直接聞くことも一つの方法として考えられる。既に養護教諭と生徒の双方を調査対象とする研究<sup>30)</sup><sup>31)</sup>や複数の養護教諭を調査対象とし、実践の構造を明らかにすることを目的とした研究<sup>32)</sup>も進められている。

今後は、他の養護教諭の実践を分析すると共に、倫理的配慮の上、生徒にインタビューする等の研究方法を組み合わせることを検討する必要があると思われる。

## 謝辞

本研究を行うにあたりご協力くださいました皆様、御指導、御助言くださいました指導教員の先生をはじめ諸先生方に深く感謝申し上げます。

## 文 献

- 1) 日本学校保健会：保健室利用状況に関する調査報告（平成 18 年度調査）,47-60,2008
- 2) 唐牛藍、佐藤綾子、佐藤道子：小・中・高等学校における保健室利用状況の実態調査,弘前学校保健科学 27,80-81,2008
- 3) 日本養護教諭教育学会：養護教諭の専門領域に関する用語の解説集〈第一版〉,6,2007
- 4) 大谷尚子：養護教諭のための養護学・序説,ジャパンマシニスト社,155,2008
- 5) 後藤ひとみ：養護学概論 第 8 章養護教諭と研究,東山書房,213-216,1999
- 6) 前掲書 4) 156
- 7) ドナルド・ショーン（佐藤学、秋田喜代美訳）：専門家の知恵,ゆみる出版,19-128,2007
- 8) 佐藤学：教師というアボリアー反省的实践へー,世織書房,102,2000
- 9) 小林央美、池田みずゑ、入駒一美、工藤宣子、斉藤ふくみ、山名康子：健康教育に必要な養護教諭の能力に関する研究（第 2 報）－健康教育における養護教諭の思考過程に着目した実践分析から－,日本養護教諭教育学会誌 9(1),33-41,2006
- 10) 工藤宣子、栗林徹、森照三：保健室活動場面における熟練養護教諭と新人養護教諭の実践的思考に関する比較研究,学校保健研究 48,290-306,2006
- 11) 砂村京子、笹川まゆみ、高橋朋子、村山貴子：日々の対応からみた「養護」に関する研究第 1 報－子どもへの対応事例の分析から－,日本養護教諭教育学会誌 4(1),15-26,2001
- 12) 笹川まゆみ、砂村京子、高橋朋子、村山貴子：日々の対応からみた「養護」に関する研究第 2 報－慢性疾患を持つ子どもの自己成長に着目して－,日本養護教諭教育学会誌 6(1),44-58,2003
- 13) 笹川まゆみ、中川裕子、阿部寿美子、大谷尚子：日常的「養護」対応の分析的研究－救急場面の事例検討から－,学校健康相談研究 1(1),31-37,2005
- 14) 高橋雅恵、大谷尚子、高橋芳子、坂本ひさこ、松平和美：救急処置場面で養護教諭が「雑談」をした意味－指の痛みを訴えて保健室に来室した高校生への対応事例－,学校健康相談研究 2(1),32-40,2005
- 15) 中川裕子、阿部寿美子、笹川まゆみ、大谷尚子：日常的「養護」対応の分析的研究 第 2 報－言葉で思いを表現することが苦手な児童の事例検討から－,学校健康相談研究 2(2),13-22,2006
- 16) 斉藤ふくみ、後藤ひとみ：研究的視点を探る養護教諭としての試み－執務記録の分析から－,日本養護教諭教育学会誌 2(1),46-54,1999
- 17) 生越達：「方向探索型」研究の在り方,日本養護教諭教育学会誌 4(1),1-5,2001
- 18) 前掲書 14) 39
- 19) 新谷ますみ：養護活動における子どもと養護教諭のニーズの共通化の営み－保健室で

の子どもと養護教諭の相互行為のエスノグラフィー的研究ー,弘前学校保健科学  
28,97-100,2009

- 20) 秋庭昌樹：教育の臨床エスノメソドロジー研究保健室の構造・機能・意味,東洋館出版社,162-180,2004
- 21) 前掲書 8) 99
- 22) 阿保康子、小林央美：多様な課題を有し頻回来室する生徒への対応のあり方に関する実践的研究～生徒の発達を育むための対応の視点から～,第5回日本教育保健学会講演集,82-83,2008
- 23) 山脇由貴子：教室の悪魔,ポプラ社,18-19,2007
- 24) 三村由香里：保健室を居場所にする子どもたちー実践知を支援に活かすー「居場所」の概念から見た保健室と、養護教諭養成の課題から見えてくるもの,日本健康相談活動学会第3回学術集会抄録集,35-37,2007
- 25) 志賀恵子、永井利枝、森田光子、大谷尚子：保健室登校生の保健室での生活の様子と養護教諭の対応,学校健康相談研究 1(1),50-57,2005
- 26) 豊嶋秋彦：子どもの心の諸問題と学校における相談活動ー共通の背景と改善契機をめぐってー,第5回日本教育保健学会講演集,20-21,2008
- 27) 門脇厚司：子どもの社会力,岩波新書,92-110,1999
- 28) 小林央美、池田みすゞ、入駒一美、工藤宣子、斉藤ふくみ、山名康子：健康教育に必要な養護教諭の能力に関する研究（第1報）ー養護教諭による健康教育の実践分析からー,日本養護教諭教育学会誌 7(1),52-62,2004
- 29) 前掲書 19) 100
- 30) 酒井都仁子、岡田加奈子、塚越潤：中学校保健室頻回来室者にとっての保健室の意味深まりプロセスおよびその影響要因ー修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いた分析ー,学校保健研究 47,321-333,2005
- 31) 高澤高子、渡部きよ子、三橋玲子、渡部知江、赤城礼子、馬場晶子：保健室来室者対応に関する一考察～来室者による評価と養護教諭の自己評価から、適切な対応のあり方を探る～,東北学校保健学会誌 57,17-18,2009
- 32) 山本浩子：養護教諭の保健室登校援助実践の構造,学校保健研究 48,497-507,2007